

イスラエルのアラブ人村落における メルキト派カトリック信徒と、 その社会に関する事例研究 —アイデンティティの形成とその様態—

文化科学研究科・地域文化学専攻 菅瀬 晶子

はじめに

本論文の目的は、イスラエル（図1参照）におけるアラブ人キリスト教徒、そのなかでもメルキト派カトリック信徒が、ガリラヤ地方内陸部の村落において、いかなる社会を形成しているかをみることにある。イスラエル国内には、北部のガリラヤ地方を中心に数多くのアラブ人村が存在するが、メルキト派信徒の特質を探るために、村民全てがメルキト派信徒であるF村の事例を取り上げる。

イスラエル国内のアラブ人市民（以下、イスラエル・アラブと呼ぶ）についての研究には、イスラエル建国直後からの歴史があり、常にイスラエル・パレスチナの世相に大きな影響を受けてきた。その傾向は時代ごとに大きく分けて3つあり、まずは1950年代から60年代にかけて、当時の与党であった労働シオニズム政党マパイ（MAPAI）とその周辺の人びとによっておこなわれた、イスラーム教徒の農村をフィールドとした人類学的研究が挙げられる。これは、マパイがアラブ人人口の多いガリラヤ地方に敷いた軍政（al-Hukūmat al-'Askariyya, Memshal Tzuva'i）と、アラブ人統治政策への貢献を想定されたものであった。その後、60年代後半から80年代にかけてみられた、イスラエル・アラブ自身による自己再定義のこころみは、パレスチナ人としてのアイデンティティをイスラエル・アラブのなかに喚起させ、当時盛んであったパレスチナ解放運動との連帯へと導こうとするものであった。この時代までの研究の問題

図1. イスラエル国とその周辺

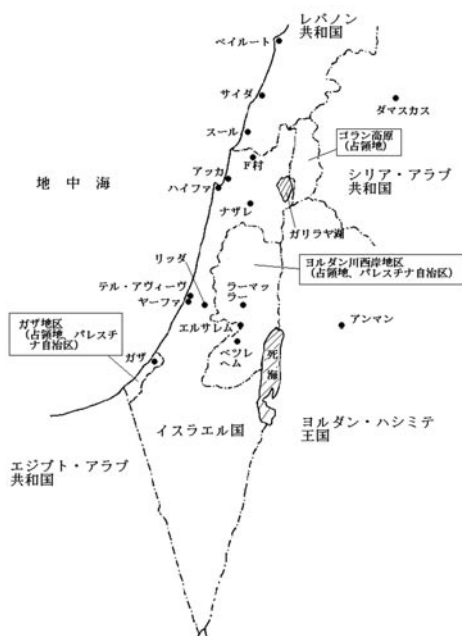
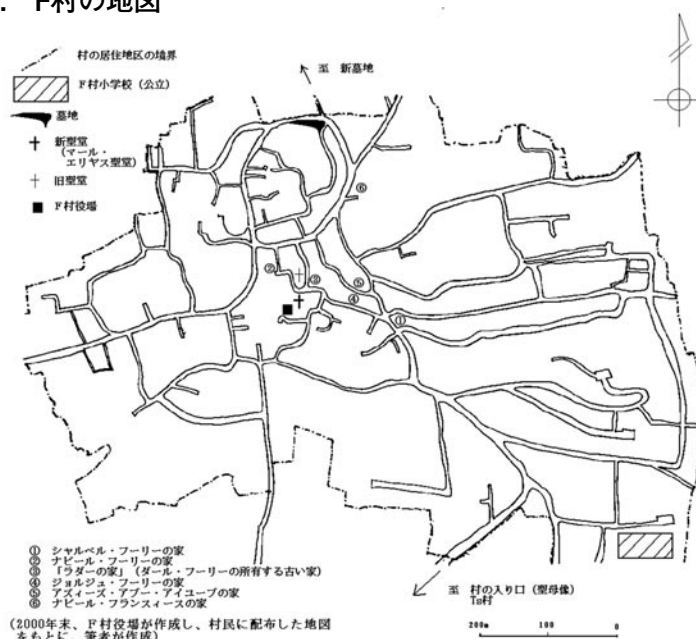


図2. F村の地図



点として、イスラエル・アラブ社会内部における、宗教・宗派の差異について無関心であったことが挙げられる。

90年代以降、イスラエル社会の変化にともない、アラブ人に対するまなざしは支配的で一元的なものから、アラブ人と同等の地点に立つものへと変化した。論点も集团的イデオロギーの分析ではなく、個々人の帰属意識や政治的見解、他者との共存への関心などへと移りつつあり、なかでもメルキト派信徒の研究者アマリア・サアルによる、ガリラヤ地方の中心的都市ハイファに住むアラブ人キリスト教徒、おもにメルキト派カトリック信徒のアイデンティティ分析も登場した。彼女はローマ・カトリック教会が運営する学校や、メルキト派カトリック教会直属のボーイ・スカウトに在籍する少年少女たちとその保護者を対象に、自己表象のありかたについて聞き取り調査をおこなった。イスラエル社会、そのなかのアラブ人社会双方の周縁に立ち位置を求め、イスラエル社会に貢献することで帰属意識を感じつつも、パレスチナ人¹としての自覚を保ち続けているというのが、彼女の提示したアラブ人キリスト教徒のアイデンティティである [Sa'ar 1998]。しかしながら、サアルの論文においてもアラブ人社会内部の多様性については看過されがちであり、アラブ人社会において大きな影響力を持つ、親族関係と婚姻関係、出身地の差異には焦点が当てられていない。本研究はこの点に注目し、対象をメルキト派カトリック信徒のみに絞ることによって、同一宗派信徒の社会における自己および身内と他者の境界線が、なにを基準として引かれるかを論点とした。また、個人的アイデンティティよりも集团的アイデンティティにより注目しているのは、一神教世界である東地中海では、個人は特定の集団に属するものという概念が一般的であるためである。つまり、ひとりの人間が「自分は宗教Aの信徒である」と名乗る場合、そこには自

図3.



図4.



図5.



分が宗教Aを信じる「一族の一員」、あるいは宗教Aの教会に集う「信徒集団の一員」であるという意味が強く含まれている。なんらかの集団に属し、その集団を絶対的な身内とみなし他者との間に境界をもうけることによって、アイデンティティは形成されるのである。

メルキト派カトリック (Melkite Greek Catholic, Rūm al-Kāthūlik al-Malakīya) とは、18世紀前半にオスマン帝国治下のシリアで誕生した、ギリシャ正教とローマ・カトリック双方の特徴を併せ持つ混合宗派である。ローマ・カトリック教会の傘下ではあるが、ギリシャ正教の名残をとどめた独自の教会組織を有する、「東方統一教会 (The Uniate Church)」のひとつとして位置づけられている。今日もシリア・アラブ共和国の首都ダマスカスに総大司教座を持ち、そこが宗派の中心地となっているが、誕生から約100年間は非公認宗派であり、情勢の変化によっては捕縛される危険性もあったため、信徒は自由を求めて各地に移住した。今日、イスラエルのガリラヤ地方、エジプトのナイル・デルタ地方だけではなく、南北アメリカのカトリック圏やオーストラリアにも信徒は拡散している。移住を厭わないこと、農村部に基盤を持ちながら、都市で商人や労働者として活躍することが、メルキト派の特徴となっている。

イスラエルにおけるメルキト派カトリック信徒人口は、北部のガリラヤ地方に集中している。これは、ガリラヤ地方がシリア、レバノンと隣接しており、18世紀中葉から19世紀にかけて、数多くのメルキト派信徒の移住者を受け容れたためである。ガリラヤ地方のメルキト派カトリック教会は、ガリラヤ司教区、正しくは「アッカ、ハイファ、ナザレおよび全ガリラヤ司教区 (Abrashīya 'Akkā wa Haifa wa al-Nāsira wa Sā'ir al-Jalīl)」として、26の教区からなっており、港湾都市ハイファ (Haifa) に置かれた司教座 (al-Matrānīya) が統括している。本論文で扱うF村も、このうちのひとつである。

F村は、メルキト派カトリック信徒のみで構成されるアラブ人村落である。本論文では、この村落社

図6.



図7.



図8.



地名、固有名詞などの表記は、日本語（英語、アラビア語、ヘブライ語）の順番になっている。アラビア語表記はThe International Journal of Middle East Studies (IJMES) で使用されている形式に準じ、英語と同様のアルファベット表記を用いる。長母音については、a、i、uの文字の上に傍線をひいた、ā、ī、ūであらわした。また、本文中でローカル・タームを使用する場合は、アルファベット表記の前にカタカナで読みを記した。なお、ローカル・タームは音標である。ヘブライ語表記は斜体であらわし、アラビア語同様、長母音については、a、i、u、oの文字の上に傍線をひいた、ā、ī、ū、ōであらわした。また、本文中でローカル・タームを使用する場合は、アルファベット表記の前にカタカナで読みを記した。

この見取り図

石室を所有するダール

- ① フーリー (ミハイル系)
- ② ジュリエス
- ③ アブー・アイユーブ
- ④ ダクワル
- ⑤ シャーヒーーン
- ⑥ マダル
- ⑦ アースイー
- ⑧ フーリー (エリヤス系)
- ⑨ ナッジャール
- ⑩ フーリー (ジュリエス系、ハリール系)
- ⑪ アフワシー
- ⑫ フランスイース

石室を所有するダール・フーリー

櫟の木

出入り口

赤杉の木立

マール・エリヤス聖堂

旧聖堂

村役場

<ダール・フリー>

ガッターズ
(ダール・フリー
始祖)

ミハイル
① 18世紀中葉、ド村部の
ムフタルに

ハリール

ジュリエス

エリヤス系

エリヤス

ラダー

ラシード
②④⑤

マターニス

エリヤス

シャルベル

ナビル

アビール

ウナム・ジ
ヨセフ

アフナー
ジョセフ

ザキー

アブナー・
ニムル

ユセフ

モニラ

ハビーブ
(シャマーズ)

アズィン
(サヒブ・ル・イード)

リヤード
(シャマーズ)

レイラ

サムー

ダール・アースイーハ
帰出

ナダー

ジョルジュ

ジョゼフ

マルタ
(ウナム・
イブラヒム)

ファウスィー

サジブ

<ダール・フランス>

シャルベル

① ムフタル
延縁者
○家系番号は、
ムフタルを
始祖から数えた
世代

② ハイファマへ移
住した男性

③ ハイファマへ移
住した女性

④ 国外へ移住
した男性

⑤ 国外へ移住
した女性

△ 男性

○ 女性

▽ 帰出した
女性

△ 故人
○家系番号は、
ムフタルを
始祖として
二世代以上前の祖先
には、親戚の代り

1. F村の概観

1-1 F村の置かれた環境

現在、イスラエル国内にはメルキト派カトリック信徒のアラブ人村が、二カ所ある。この二村、M村とF村は距離も近く、いずれもレバノン国境にほど近い場所に位置している。

M村（人口約2700人）は、地中海沿岸の都市ナハリヤと内陸部の町ツファット（*Tzfāt*、アラビア語名称はサファド、*Safad*）を結ぶ国道89号線沿いに位置し、比較的開かれた環境にある。村の隣には十字軍の城跡モンフォール（Montfort）があることから、古来この村が街道の要害であったことをうかがい知ることができる。街道を挟んで南東には、この地域でもっとも大きいアラブ人村であるTs村（人口約1万人）がある。Ts村は人口の約3分の2をスンニー派イスラーム教徒、約3分の1をメルキト派カトリック信徒が占め、ほかに若干のドルーズ信徒やチェルケス²が居住している。

このM村およびTs村を通過したのち、国道89号線をはずれ、さらに北上した海拔660mの丘の上にあるのが、この論文で扱うF村である（図2参照）。ナハリヤからの直線距離は約20kmと、この数字だけ

図11 ダール・ナッジャールの系譜と
ダール・フーリー
ダール・ジュリエスとの姻戚関係

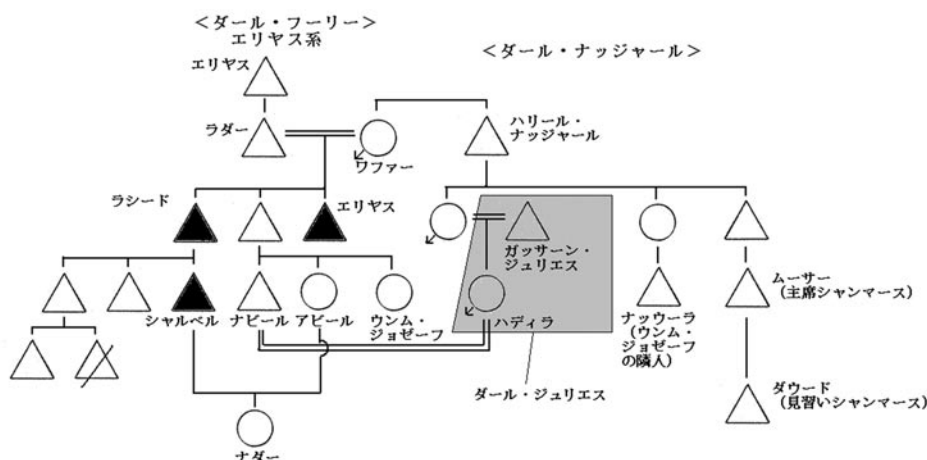
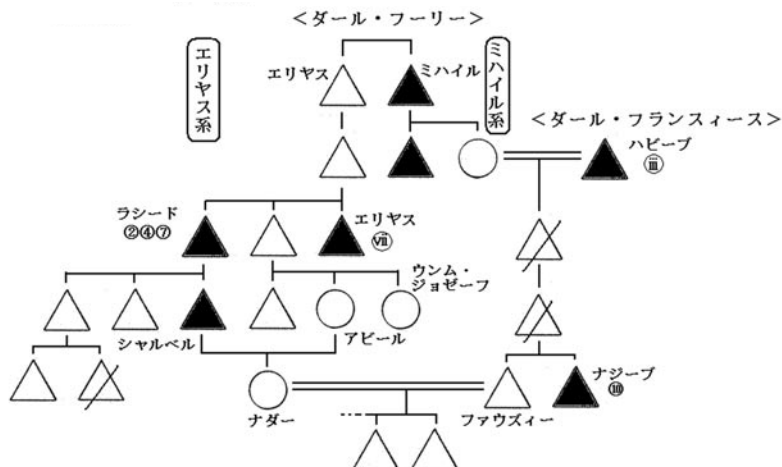


図12 ダール・フランスの系譜と
ダール・フーリーとの姻戚関係



みれば、さほど山深い僻地という印象は受けない。しかしながら、途中ロシア系新移民が数多く居住するユダヤ人入植地MIや、ドルーズ信徒と若干のメルキト派信徒からなるアラブ人村Ks、モシャーヴ³などを通過する山道は起伏が激しい。舗装されているとはいえ、霧の立ちこめる雨季や夜間の運転は熟練した運転手でなければ危険であるとされている。今日もなお、F村に行くには、困難がともなうのである。

F村で生まれ育った人びとは、村にいるときもいないときも、みずからの村を「この世の果て (akhir Dunyā)」と呼ぶ。それは単に、峠道をはるばる越えたかなたに村があるというだけではなく、周辺諸国から孤立したイスラエルの周縁に自分たちの故郷があるという事実を反映した形容である。ユダヤ人国家イスラエルにおいて、F村は中央から遠く離れたところに位置する、アラブ人キリスト教徒の村である。村の目の前の丘陵を幾つか越えれば、そこはレバノンであり、距離でいえばイスラエルが首都と称するエルサレムよりも、レバノンの首都ベイルートのほうが近い。かつて村の人びとは大きな買い物をするときはベイルートへ出かけるのを常としており、イスラエル・レバノン間の国境が封鎖される1982

表1 F村全ダール一覧

(ダールの戸数は、筆者が書写したF村の2000年度電話帳に基づく)

ダール名	戸数	第2章第2節のカテゴリー・出身地	顕著な婚姻関係
アブー・アイユブ	34	I・レバノン	フリー、アースイー
アブー・サマアーン	2	III・ガリラヤ地方ソフマータ	アースイー
アシュカル	22	I・レバノン	アースイー、フリー
バルフーム	8	I・レバノン	アースイー、フリー
ビシャーラ	1	III・?	フリー
パッルータ	21	I・ヨルダン	アースイー
タルハミー	7	II・西岸ベツレヘム	フリー
ジュリエス	32	I・レバノン	フリー、アースイー
ハッラーウ	11	I・レバノン	
フリー	94	I・シリア	
ダクワル	39	I・レバノン	フリー、ジュリエス
サビート	8	III・ガリラヤ地方イクリット	
サマアーン	18	I・レバノン	アースイー
シャーヒー	18	II・Ts村	フリー
シャーイル	11	IV・トルコ	アースイー
シャンマース	16	I・シリア	フリー
シャフラー	19	I・レバノン	
アースイー	95	I・レバノン	
フランスィース	14	I・レバノン	フリー
カスィース	11	II・ガリラヤ地方ソフマータ	
ナッジャール	19	I・レバノン	フリー
アフワジー	2	I・レバノン	フリー
ダウヒー	1	III・ガリラヤ地方イクリット	
マタル	11	I・レバノン	フリー
マフワル	4	I・レバノン	
ヒンディイエ	2	I・ガリラヤ地方イクリット	
ジャドゥーン	1	III・ガリラヤ地方アル・パッサ	
アティイエ	1	III・?	
マンスール	3	II・ガリラヤ地方イスフィヤ	フリー

年までは、両国間の移動は可能であった⁴。今でも村の老人たちの思い浮かべる都会イメージとは、テル・アヴィーヴでもハイファでもなく、ベイルートのそれである。しかしながら1982年、イスラエル軍のベイルート侵攻を受けてイスラエル・レバノン間の国境は閉ざされる。これ以降F村の人びとをはじめ、イスラエル国籍を有する全ての者が、レバノンを訪れることはできなくなった。目の前に見えていながら、F村の歴史と深く関わってきたレバノン、そしてシリアは、今や村民たちにとって遠い別世界なのである。国内においてはマイノリティの住む陸の孤島として扱われ、さらには地続きの周辺諸国とも交流を絶たれているという点で、F村は確かに「この世の果て」といえる。しかしながらここ数年は、テレビで衛星放送を受信する村民が増え、レバノンや湾岸諸国のアラビア語による報道番組を観ることが可能となった。村民たちは早朝にレバノンのキリスト教系放送局が流す礼拝の録画映像や、夕食時に幾つもの放送局で放映されるシリア製コメディを観ることを楽しみにしている。直接交流することは難しくとも、メディアを通じてレバノンやシリアに触れる機会が与えられているのである。

今日（2002年末現在）、F村の人口は3000人あまりである。「村」と呼ぶには不適切ともいえる人数であるが、人口約1万にのぼるTs村ですら、行政単位は「村」である。ガリラヤ地方に点在するアラブ人のみの居住地のうち、イスラエル政府から「市」として認定されているのはわずか三カ所であり[Al-Haj & Rosenfeld 1990:130]⁵、それ以外は人口が3000人であろうと600人であろうと、すべて「村」である。自治体としての村には、人口に応じて国家予算が割り当てられるが、行政区分が村であるか市であるかによって、予算の配分に差が生じる。F村を含め、あらゆるアラブ人村が予算不足に苦しんでおり、これは幾度か国会でも議題にのぼっている問題であるが、ここでは詳しく触れない。

村のおもな産業は農業と手工業である。農産物はオリーブと小麦が主であるが（図3参照）、農作物を売って現金収入を得ている者は皆無にひとしく、基本的に自家消費分を栽培しているにすぎない。たとえば、オリーブオイルを売るにしても、知り合いのユダヤ人のたつての希望で1タナケ（約15リットル）を適価にて譲る、といった具合であるので、これを現金収入と呼ぶには語弊があるであろう。耕作地を持つ者でも他に職を持ち、農業は片手間におこなうというのが一般的である。F村はキリスト教徒の村だけあって、「イエスの職業」である大工が尊敬の対象であり、またその職に就く者も多い。そのような

表2 第11期F村村議会議員のダール別内訳

所属ダール	村長	村議会議員	派閥（フリーまたはアースイー）
フリー	1（ユーセフ氏）	2	—
ダクワル	—	2	フリー
ジュリエス	—	1	フリー、ややアースイー寄り
シャール	—	1	アースイー
サマアーン	—	1	アースイー
アシュカル	—	1	アースイー
アースイー	—	1	—

表3 19世紀中葉～1956年のF村の歴代ムフタル

図5中の番号	在職年代	ムフタルの名前・ダール名（ダール・フリーの場合は系統名）	血縁関係	在職中の出来事
①	19世紀後半	ミハイル・フリー（ミハイル系）	ダール・フリー始祖の四人の息子のうちのひとり。	ムフタル制の施行
②	19世紀後半	ショウイー・フリー（ミハイル系）	ミハイルの長男。	
③	19世紀末	ハビブ・フランスィーズ	ミハイルの娘婿、ショウイーの義理の弟。	
④	20世紀初頭	アーディル・アブー・アイヌーブ	現在サーヒブ・ル・イードをつとめるアズィーズ氏の祖父。	第一次世界大戦、オスマン朝滅亡
⑤	1920年代	ハンナー・シャール	シャルベルの妻の母親とは遠縁にあたる。	
⑥	1930年ごろ～1945年	アディブ・フリー（ミハイル系）	②の甥。移住先のアメリカから帰還してつとめたが、アラブ大革命時はレバノンに亡命。不在中、弟たちが代役をつとめた。	アラブ大反乱（1936年～39年）、第二次世界大戦
⑦	1945年～1956年	エリヤス・フリー（エリヤス系）	のちに第ラシード、甥シャルベルが村長歴任。	イスラエル建国、第一次・第二次中東戦争

者は、平日は大工として自宅の工房で家具を作ったり、近隣のアラブ人村やユダヤ人入植地へ受注品を届けに行ったりしながら、ユダヤ人社会が休日である安息日に入る金曜日の午後や土曜日に農作業をおこなうという生活を送っている。村の指導者である村長や村議会議員、小学校教師などが、自分の所有する農地でオリーブの剪定や収穫にいそしんでいる姿も、決して珍しいものではない。

1-2 メルキト派村としてのF村の歴史と現状

既に触れたように、F村の人口約3000人はすべてがアラブ人であり、メルキト派カトリックに属するキリスト教徒である。18世紀末まではイスラーム教徒も村に住んでいたというが、もはや彼らの存在は、村の昔話りのなかにしか存在しない[¹Arraf & Najjar 18]。F村出身者といえ、それはキリスト教徒であるという社会通念が、イスラエル・アラブのなかには定着している。

村自体の歴史は前16世紀にまで遡ることができるが、F村がキリスト教徒のみの村となったのは、それほど古い時代のことではない。現在F村に住んでいるメルキト派カトリック信徒の祖先は、もともとF村に住んでいた訳ではなく、いずれも18世紀中葉以降、シリアやレバノンからF村へと移住してきた人びとである。この時代、ギリシャ正教と分離したばかりのメルキト派カトリックが、オスマン帝国治下にあってミッレトの認可を受けていない非公認宗派であったことは、第1章で記述した。このため、メルキト派信徒はオスマン帝国の目の届かない地方政権下に移住して、生活の安全を確保しようとしたのである。当時のF村付近は、メルキト派を庇護したことで知られるアッカ総督ザーヒル・アル・ウマルの勢力下にあり、メルキト派信徒にとっては好都合な場所であった。F村にはビザンティン時代に建立されたといわれる聖堂が存在するが、この聖堂がメルキト派カトリック教会所属の認可を受けたのは1860年のことである。すくなくともこの年以前には、相当数のメルキト派信徒が移住していたと考えてよい。この聖堂は今日「旧聖堂 (al-Kanīsat al-Qadīma、図4参照)」と呼ばれており、建物の一部が崩落しているため、現在は使われていない。F村の行政機関である村役場は、近い将来この旧聖堂に手を加え、キリスト教徒村としてのF村の誇りを象徴する存在として、観光事業に役立てようと計画しているところである。

今日、F村の信仰の中心となっているのは、村役場の隣に建っているマール・エリヤス聖堂 (Kanīsat Mār Ilyās、図5参照) である。マール・エリヤスとは、旧約聖書の列王記上17章から同下2章にかけて活躍する預言者エリヤをさし、正教・カトリックを問わず、東地中海地域で非常に人気の高い聖者⁶である。このマール・エリヤス聖堂は1947年建立の新しいもので、様式は古典的なバシリカ様式であるが、メルキト派の聖堂の多くがそなえているギリシャ正教の名残、イコノスタシス⁷は存在しない。イコノスタシスがないため剥き出しになっている祭壇は、ローマ・カトリックの聖堂の形式にのっとっている (図6参照)。敷地内には司祭館と講堂、図書館があり、司祭館にはレバノン人の尼僧が住んでいる。F村赴任司祭は、F村から数kmの距離にあるSh村に住んでおり、ミサのある日曜や冠婚葬祭の折にのみ、みずから自動車を運転してやって来る。講堂と図書館に関しては、管理は聖堂がおこなっているが、運営は村役場がおこなっている。村議会議員選挙はこの講堂でおこなわれ、ほかに葬儀の前のアジャル (ajal) と呼ばれる儀礼⁸や、教会主催の講演会などにも使用される。

さて、村民にとって、村におけるメルキト派カトリック教会の窓口は、司祭に他ならない。F村は、メルキト派カトリックのガリラヤ司教座が統括する26教区のうちのひとつであり、教区には通常、司教座から赴任司祭が派遣され、彼は聖堂に付設された司祭館に常駐することになっている。任期はまちまちであり、二年ほどの短期間の場合もあれば、十数年もの長期に渡る場合もある。赴任期間の長短には、司祭自身の意向が反映されているようである⁹。司祭は村民と生活をともにし、過去に読み書きに長けた

一般信徒が在俗司祭をつとめたという慣習にならい、小学校の教師を兼ねることが普通であった [Chacour 1984]。また、カトリックでは司祭が信徒の罪の告白（告解）を聴き、その罪を赦すという重要な役割がある。司祭は聖職者であると同時に、教育者であり相談員でもあるのである。

しかしながら、F村のマール・エリヤス聖堂には、前述のように赴任司祭は常駐していない。近隣のSh村に住み、日曜日や冠婚葬祭時など、ミサを挙げるときにのみ、みずから車を運転してやって来る。近隣とはいっても、Sh村からF村までは車で急いでも20分はかかる距離であり、つまり村民たちは司祭に急用がある場合、すぐには会えないのである。村民たちは、不便を感じていないのであろうか。

司祭がなぜ村に住まないのかということを、いつも聖堂の周辺で立ち働いている村民に尋ねたところ、彼らはその理由を二点挙げた。ひとつには、マール・エリヤス聖堂の司祭館は修復中で、司祭が住むには不便であるということ。もう一点は、司祭がSh村出身であるということであった。Sh村には彼の親族がおり、わざわざ親族と離れてF村に住んでもらう必要はないというのが、彼らの意見であった。

常駐していない代わりに、司祭はミサの後にはできるだけ村にとどまり、村民と接触する機会を持つとしている。事実、オリーブの収穫期に葬儀ミサのためにF村を訪れた司祭が、ミサに出席していなかった村民のオリーブ畑を巡回し、農作業中の彼らと挨拶を交わしている姿を頻繁に見かけた。また、修復中の司祭館の一室には、常駐ではないがレバノン人の尼僧が寝泊まりしていた。彼女の国籍はレバノンであるが、母親はF村出身であり、両親は1948年までハイファに住んでいたという。母親の故郷で奉仕することを望んだのが、彼女がF村に来た理由であり、村民もそのことを非常に好ましく思っている。彼女は女性信徒の相談をしばしば引き受けており、村民から大きな信頼を寄せられている様子であった。村民は司祭の不在を問題であるとは考えておらず、赴任司祭を介したF村村民とガリラヤ司教座の関係は良好と言えるであろう。

教区を中心である聖堂に司祭が常駐しないというのは、異常な事態のようにみえるが、実はさほど珍しいことではない。1965年にF村を訪問したフランチェスコ会修道士のバガッティは、司祭が村には住んでおらず、日曜日と木曜日のみやって来ると記述している [Bagatti 2001: 181-182]。また、ハイファに二カ所あるメルキト派カトリック聖堂のうち、「聖処女聖堂 (Kanīsat al- 'Adhrā')」にも司祭は常駐せず、ミサは毎月第一日曜日と降誕祭・復活祭などの重要な祭事に、司教座の高位聖職者がやって来ておこなうもののみである。ただし、ハイファは多くの信徒を抱え、聖処女聖堂の他にもう一カ所メルキト派の聖堂が存在する都市であり、かたやF村は地理的に隔絶された村である。にも関わらず、F村の信徒が司祭不在に不安をおぼえないのは、司祭自身の努力や尼僧の存在にもよるであろうが、なによりここがメルキト派信徒のみの村であるということが大きな要因として挙げられるであろう。

2. 血縁の力とその影響：アラブ人村としてのF村、その基盤

この節と次の節においては、アラブ人村としてのF村の側面を取り上げ、その社会がいかなる仕組みをもって形成されているかについて述べる。

ユダヤ人国家イスラエルにおいて、アラブ人は常にユダヤ人とは別の政策のもとに統治されてきた。建国から約30年間、与党の座にあった労働シオニズム政党は、アラブ人市民からの支持を得るために、アラブ人社会において今でも大きな力を持つ親族関係、および宗教を利用してきた。国会選挙に代表される民主主義と、オスマン帝国の徴税システムを転用した地方行政制度、そしてアラブ人特有の父系親族集団を単位とした村落内部の権力関係が複雑に絡みあい、均衡を保っているのが、イスラエル国内の

アラブ人村である。

本節ではまず、アラブ人社会における親族関係とはいかなるものなのかについて述べ、それから具体的にF村の事例を紹介することにした。

2-1 ダールとは：ハムーレとの相違と合致

イスラエル・パレスチナのアラブ人社会をフィールドとした研究において、重要なキーワードとしてしばしば登場するのが、ハムーレ (hamūla) である。正則アラビア語の発音では「ハムーラ」であるが、当該地域ではハムーレと発音されるので、本論文でも以下ハムーレと表記することにする。

ハムーレとは、何をさすのか。一言で定義すれば、父系親族集団である。ハムーレには必ず始祖たるひとりの男性が存在し、彼から発したすべての子孫はその構成員となる。女性のハムーレ構成員が、たとえ婚姻によって他のハムーレの者に嫁いても、彼女は生涯、生まれたときのハムーレに属するとみなされる。寡婦となった場合も、彼女の生活の面倒をみるのは彼女の父親や兄弟、父方のおじであり、婚家の者ではない。それほどハムーレの紐帯は強く、村落における影響力は大きい。農業のさかんなシャーム地方¹⁰のアラブ人社会において、農村は社会の基盤となるため、自然とハムーレの影響力は強くなる。たとえ農民が都市に移住したとしても、それは変わらない。

ところが奇妙なことに、村落における日常生活のなかで、ハムーレということばを耳にすることは一切ない。代わりにしきりと聞こえてくるのが、ダール (dār) ということばである。「自分はダールXの出身である (anā min dār X)」、「イブラーヒームの奥さんも私たちと同じダールの出身だ (marat Ibrāhīm kamān min dār nā)」、などといったように、自己紹介をするときや、血縁関係を説明するとき、頻繁に用いられる。アラビア語では通常、ダールという単語は邸宅や国家という意味で用いられるが、この場合はもちろん、そのような意味を持っているのではない。それでは一体、ダールとは何を意味するのか。

実は、この場合のダールとはすなわち、ハムーレをさすのである¹¹。アラブ人社会の父系親族集団を、社会の外から眺めたとき、それはハムーレと呼ばれる。しかしながら、社会の内側から父系親族集団をさすとき、それはハムーレではなく、ダールと呼ばれる。つまり、ハムーレは父系親族集団をさして研究者が用いる用語であり、日常会話に登場するものではない。当事者たちであるアラブ人自身はダールという呼称を用い、当該社会に属さない研究者たちが、もっぱらハムーレという呼称を使用してきたのである。ダールとハムーレ、どちらの呼び名を使用するかは、語り手がその社会に属しているか否かによって決定されるのである。本論文においては、村民たちの視点に沿うという意図のもとに、F村に限っては父系親族集団をハムーレではなく、ダールと呼ぶことにする。F村以外の、一般論としてのアラブ人村落における父系親族集団は、これまで通りハムーレと呼ぶことにする。

ダールと婚姻関係は、不可分の関係にある。婚姻関係によってダールには派閥が生じ、派閥の結束を強化するために、彼らはみずからのダール内か、同じ派閥に属するダールから配偶者を選ぶことを好む。また、ダール内外の婚姻関係が村内政治におよぼす影響も非常に強く、あらゆる婚姻関係は、ダールの権力関係を考慮して結ばれると言っても過言ではない。このことについては、事例をまじえて次項で述べる。

2-2 ダールの歴史と序列：「F村の者」とは誰をさすか

本項では、F村のダールの歴史と序列について、それぞれ典型的な例を挙げて述べる。

各ダールにはF村への定着の時期や土地所有の有無によって序列が存在し、規模の大小にも差がある。本項ではまずその分類をおこない、各分類の代表的なダールの歴史を紹介する。そして、ダールの辿ってきた歴史と土地所有が、どのようにダールの持つ力に影響を与えているかについてまとめる。

2-2-1 F村における各ダールの分類と序列

F村に現存する30家のダールと、現在ダールとしては消滅しているが、その血を引く者が村に居住している5家のダールは、以下のような四種類に分類が可能である。戸数など、詳しい説明は表1に譲る。

I. レバノンあるいはシリア南部、ヨルダン北部からの、初期の移住者

18家のダールが、周辺のシリア、レバノン、ヨルダンから、18世紀～19世紀に移住している。このうち、レバノン起源のダールが15家と最も多く、シリア南部とヨルダン北部起源がそれぞれ2家ずつである。彼らの特徴は、18世紀当時から現在に至るまでの人数の多さと所有する土地の広大さであり、これらの要素は、村における権力の掌握と直結する。オスマン帝国時代から現在に至るまで、村内政治を受け持っているのは、このカテゴリーに属するダールである。

<ダール・フーリーの歴史>

もともとはシリア南部のハウラーン地方にいたが、経済的に困窮し、新天地を求めるために村を出る。18世紀中葉にガリラヤ湖畔のティベリヤを経由して、F村に定住した。ハウラーン地方にいた頃は、シリア・レバノンのキリスト教徒に一般的な別のダール名を名乗っていたが、F村に定着したダールの始祖ガッターズとその四男エリヤスがメルキト派の司祭であったため¹²、アラビア語でキリスト教の聖職者を意味するフーリー (khūrī) に改名した。ガッターズはF村にはじめてメルキト派の信仰をもたらした人物であり、彼はエリヤスともども、親子二代にわたってF村や近隣のKs村の聖堂で聖務にあたったという。

始祖にあたるガッターズと、その4人の息子たちがF村に移住してきたとき、村にはイスラーム教徒がいた。しかしながらほどなくして彼らは村から去り、ダール・フーリーの人びとは彼らから土地を買い取った¹³。村の聖堂近くに、ダール・フーリーの人びとが建てた古い家、通称「ラダーの家」が現存するが、これは英国委任統治時代初期に、村ではじめてコンクリートを使用して建てられた家として知られ、同ダールの人びとはたいへん誇りに思っている。また、村の中心からやや離れた場所を開墾し、1950年代まではオリーブや小麦のみならず、タバコの栽培もおこなっていた。ダール・フーリーは現在も、F村でもっとも広大な土地を有している。村議会における勢力も強く、イスラエル建国後1965年から導入された村議会制において、歴代村長9人中4人を輩出している。また、F村の特徴として、このダールともうひとつ、同規模のダール・アスィーのみが、複数の系統に分かれているという点が挙げられる。ダール・フーリーの場合、ダールの始祖はあくまで、F村初のメルキト派司祭であったガッターズ・フーリーであるが、彼の4人の息子の子孫たちはダール・フーリー内において、それぞれ別の系統集団を形成している。4人の息子たちの名前にちなみ、それぞれの系統はハリール、ジュリエス、ミハイル、エリヤスの名で呼ばれ、このうちミハイル系がもっとも多くの構成員を抱えている。また、前述の「ラダーの家」を建てたのは、エリヤス系の人びとである。

(2000年11月～12月、シャルベル・フーリー、アビール・フーリー、ナビール・フーリー、ウンム・ジョゼーフからの聞き取りより。)

II. ガリラヤ地方の近隣の村、ヨルダン川西岸からの、後期の移住者

婚姻や、それまで暮らしていた土地での失敗などの理由により、ガリラヤ地方やヨルダン川西岸地方の他村から移住してきたダールが、F村には4家ある。移住の時期は。のダールよりはやや遅く、19世紀以降である。遅くに移住したため人数も少なく、所有する土地はわずかであり、なかには土地を持たないダールもある。大ダールとの婚姻や移住の末、これまでに消滅したダールもいくつかある。

＜ダール・タルハミーの歴史＞

ガリラヤ地方ではなく、ヨルダン川西岸地区中南部に位置し、イエス生誕の地として有名なベツレヘム（バイト・ラハム、Bait Laham）出身。同名の村がガリラヤ地方にあるが、彼らの出身地は西岸のベツレヘムであるという。ベツレヘムでは、この町とその周辺に住むキリスト教徒によくみられるダール名を名乗っていたが、F村に移住したのち、「ベツレヘムの人」¹⁴という意味のダール名に改めた。移住の理由は、ベツレヘムにおける事業の失敗であるという。移住したダールの始祖は、F村で大工となり、その職は子孫に受け継がれることとなった。このダールが、村議会議員を輩出したことはない。（2000年12月、ヤァクブ・タルハミーからの聞き取りより。）

Ⅲ. ナクバによる移住者

イスラエル建国に伴う、1948年前後の騒乱状態を、アラビア語で「ナクバ (al-Nakba)」という。英国委任統治領内では、ユダヤ人の武装組織が建国のために活動を繰り広げており、その過程でガリラヤ地方各地ではアラブ人農村の破壊、村民の追放・虐殺がおこなわれた。このナクバにより故郷の村を追われ、F村に移住を余儀なくされた人びとが、この三番目のカテゴリーに振り分けられる。7家のダールがこのカテゴリーに入る。村内の社会活動に積極的に関わろうとするが、村の中核を担うカテゴリーⅠのダールからは、F村に根ざさないよそ者¹⁵として軽視される傾向にある。

＜ダール・ヒンディイエの歴史＞

ナクバが起こるまでは、ダール・ヒンディイエの人びとはF村にほど近いイクリット村に住んでいた。イクリット村はメルキト派カトリック信徒とイスラーム教徒の住む小さな村であったが、1948年10月、イスラエル軍によって占領され、破壊された [Khalidi(ed.) 1992: 16]。村民はガリラヤ地方の各地、あるいはレバノンなどへ離散し、現在に至る。同時期に破壊されたメルキト派信徒とマロン派カトリック信徒、イスラーム教徒の村カフル・ビルアムと同様、イクリット村はナクバの悲劇の象徴的存在として有名である。このときイクリット村から4家のダールが難を逃れてF村に移住したが、ダール全体がまとめて移住した訳ではない。ダール・ヒンディイエの場合は1世帯だけであり、この世帯のふたりの息子のうちひとりとは成人後、Ts村へ移り住んだ。

ナクバによって移住してきたダールは7つあったが、そのうちF村に現在も残っているのは、このダール・ヒンディイエを含めて3家のダールのみである。これらのダールが、村議会議員を輩出したことはない。

（2000年12月、ブーロス・ヒンディイエからの聞き取りより。）

Ⅳ. 非アラブの移住者

F村には、アルメニア人とトルコ人のダールがそれぞれひとつずつ存在する。アルメニア人のダールは、親族集団としては既に絶えてはいるが、同家との婚姻によってその血を受け継いだ者が今も村に住んでいる。いずれも今はアラブ化し、その名残をとどめてはいない。現存するトルコ人のダールは、カテゴリーⅡのダールと同化している。

＜ダール・アルビヤーンの歴史＞

F村唯一のアルメニア人のダールであるが、現在ダールとしては事実上断絶している。ダール・タルハミーの由来を語ってくれたヤァクブ・タルハミーの妻は、ダール・アルビヤーン出身の父親と、ダール・フーリー出身の母親の間に生まれた女性である。彼女の祖父一家は、1915年から16年にかけて起こったオスマン帝国によるアルメニア人大虐殺から逃れ、F村に移住してきた。移住当初からダール・フーリーが所有する借家に住まい、金銭的にもダール・フーリーの援助を受けていたという。このダー

ルもまた、村議会議員を輩出したことはない。

(2000年12月、ヤァクブ・タルハミーとウンム・ジョゼーフからの聞き取りより。)

2-2-2 F村墓地の配置にみるダールの序列

30家あるこれらF村のダールにも、内部で序列が存在する。上に挙げた4つの分類がほぼそれにあたり、土地を所有し構成員が多く、早い時代に村に定住したダール、つまりⅠのカテゴリーに属するダールが、F村の全ダールの最上位にあり、「もともとF村にいる」とみなされる人びとである。村議会議員を輩出するのはカテゴリーⅠのダールに限られ、もちろんⅠに分類されるなかにも序列は存在する。

カテゴリーⅠに次ぐ位置にあるのがⅡのダールであるが、このカテゴリーに属するダールは数も少なく、あまり目立たない。ダール・タルハミーの例にあるように、おおむねカテゴリーⅠのダールと血縁関係を結んでおり、その庇護下に置かれている。ここまでがF村出身者とみなされる人びとであり、彼らはF村がみずからの出身地であり、そこに自分が「根ざしている (majdhūr)」と考えている。

そして、Ⅰのダールからはよそ者として軽んじられているのが、カテゴリーⅢに属する、比較的遅い時代に村外から移住してきたダールである。彼らは土地を持たず、人数も少ない。ことにⅢに属するダールは、1948年のナクバによって故郷を追われるという、理不尽な理由からF村に移住している。このため、F村への執着はあまりなく、あくまで故郷の村に自分のルーツがあると考えているようである。カテゴリーⅠ、Ⅱのダールに属する人びともまた、カテゴリーⅢの人びとをF村出身者であるとはみなしておらず、積極的に接触を持とうとはしない。たとえば、ダール・ヒンディイエの歴史を語ってくれたブーロス・ヒンディイエは、村の聖堂でミサがおこなわれるときに聖歌を歌ったり、聖書を朗読したりするシャンマース (shammās) のひとりであるが、カテゴリーⅠの有力ダール出身者が名を連ねるなか、カテゴリーⅢに属するダールの出身者は彼のみである。ブーロスは他の有力ダール出身のシャンマースとはほとんど接触を持たず、司祭館修復や教会が主催する子どもたちのサマーキャンプなどの奉仕活動にも参加しない。これは彼が村の出身者とみなされておらず、他のシャンマースが彼に声をかけないためである。彼についての記述は、本論文の脚注30を参照されたい。

ダールの序列を知るうえで、興味深いものがF村の墓地である (図7参照)。F村は、それぞれ「旧村 (al-Balad al-Qadīma)」¹⁶、「新村 (al-Balad al-Jadīda)」と呼ばれるふたつの丘陵に拡散するかたちで集落が存在しているが、墓地はこのうち古くから拓けた「旧村」丘陵の北側斜面に位置している。墓地の古い箇所は鉄の門扉がついた柵で囲われており、そのなかに棺をおさめる石室がダールごとに並んでいるが (図8参照)、この墓地に石室を所有しているのはカテゴリーⅠのなかでも10の古参ダールのみであった (図9参照)。その他のダールは、村のはずれに位置する別の墓地に石室をもうけており、カテゴリーⅢのダールはF村ではなく、ナクバ以前に住んでいた村の跡地に墓地をもうけている。

さて、F村「旧村」の墓地であるが、通常は1ダールにつき、ひとつの石室を所有している。ところがそのなかでダール・フーリーのみが、3つの石室を所有している。94世帯のダール・フーリーとはほぼ同規模の95世帯からなり、複数の系統に分かれているダール・アースイーでさえも、石室はひとつしか有していない。ダール・フーリーの墓所がF村の墓地のなかで、いかに異例の存在であるかが分かるであろう。

ダール・フーリーが4つの系統に分かれていることは、先に述べたとおりである。この4つの系統のうち、独立した石室を持っているのはミハイル系とエリヤス系のみであり、残るジュリエス系とハリール系はひとつの石室を共有している。ミハイル系とエリヤス系の規模がダール・フーリー内部でも大きいことは事実であるが、それだけが理由ではない。18世紀中葉にF村に定着して以来、両系統は常に村

を主導する役割を担ってきた、影響力の大きな集団なのである。

両系統の始祖であるミハイルとエリヤスは、それぞれF村ダール・フリーの初代であるガッターズの三男と四男である(図10参照)。ミハイルはダールの代表者であるシャイフ(shīkh)としてダール・フリーを、オスマン帝国の最末端の徴税・行政官であるムフタル(mukhtār)としてF村全体を統括した。ムフタル制は19世紀中葉、オスマン帝国の行政改革によって新しくもうけられた地方行政システムであり、F村で初のムフタルとなったのが、このミハイル・フリーである。また、エリヤスは父ガッターズの後を継いでF村のメルキト派世俗司祭となつて、村民の人望を集めたと言われている。両系統は多くの構成員を抱え、1858年のオスマン土地法の施行により土地登記制度が始まり、以後広大な農地を所有して、地主として富を蓄えた。さらにはダール内部で婚姻関係を結ぶことによって結束を強め、またその一方でF村内部の他の有力ダールとも婚姻関係を結び、基盤を固めていった。ムフタル制を含め、ダール・フリーの血縁関係と村内政治における地位については、次の節で述べる。

3. 村落における行政システムとダールの影響力

3-1 一部の有力ダールが村議会に与える影響：98年の村議会議員選挙の結果より

父系親族集団ダールの役割がもっとも明確にあらわれるのが、村落部の代議機関である村議会(Majlis al-Baladīya)、およびその成員を選出する村議会議員選挙である。選挙は四年の任期が切れるたびにおこなわれる。村長(Ra'īs al-Majlis, mukhtār)および村議会議員('Udū al-Majlis)は、有権者(18歳以上の男女)の投票により複数の立候補者のなかから選出され、得票順に村長、副村長、その他の村議会議員が選出される。イスラエルでは国会議員選挙は比例代表制が採られているが、アラブ人村の村議会議員選挙は表面上、政党とは直接関係はない。立候補と投票のゆくえに大きな影響をおよぼしているのは政党ではなく、ダールの力である。

イスラエル建国直後の1948年から66年まで、ガリラヤ地方には軍政が敷かれ、アラブ人農村はいずれもイスラエル軍の統制下にあった。1950年代末から、試験的にガリラヤ地方各地のアラブ人村落で地方選挙がおこなわれた後、軍政が終結する前年の1965年、英国委任統治時代の制度に手を加えた地方行政制度が施行される。F村で第1期村議会議員選挙が実施されたのも、この1965年のことであつた。筆者がF村で調査をおこなった2000年末、F村の村議会は11期目(1998年11月～2001年4月)を迎えていた。村議会議員の定員は各村の人口によって異なり、人口約3000人のF村の場合、定員は村長を含めて10名である。調査当時の村長はダール・フリーのユーセフ氏であり、9名の村議会議員は、ダールごとに分類すると表2のようになった。

既に述べたように、F村には現在、30家のダールが存在している。ところが第11期村議会に参加しているのは、わずか7ダールのみである。しかも、ひとりも村議会議員を出さないダールがある一方で、複数の村議会議員を輩出するダールが存在する。なかでもダール・フリーが、村長ユーセフ氏を含めて3名の村議会議員を出し、突出しているのが目につく。しかしながら、一見不均衡にみえるこの村議会のダール別内訳も、婚姻関係に基づくダールの派閥と力関係をみれば、巧妙に均衡の取れたものであることが分かるのである。

F村のカテゴリーIに分類されるダールのうち、もっとも構成員が多く、力を持っているのはダール・フリーとダール・アースイーである。両者ともに700人以上のものぼる成員を抱え、この2ダールのみでF村総人口の約半数を占める。その他のダールは婚姻関係によってフリー派かアースイー派に

振り分けることが可能であり、第11期村議会議員のうち、ダール・ダクワルがダール・フリー派、ダール・ジュリエスがややアースイー寄りのダール・フリー派、そのほかはダール・アースイー派である。歴代村長はダール・フリーとダール・アースイー双方の陣営が交代でつとめ、村議会議員も両者の均衡が保たれるように選出されている。

ダール・フリーは村議会制が導入される以前から、F村の主導権を握っていた。オスマン帝国末期の19世紀中葉から英国委任統治時代を経て、イスラエル建国後の村議会制施行に至る約100年間、村の行政制度としてはオスマン時代のものであるムフタル制 (Nizām al-Mukhtār) が採られ、この制度が今日の村議会制の土台となっている。ムフタルとは、この制度において徴税や行政を司る者の役職名であるが、この名が今日村長をあらわす名称として生きていることに、両制度の関係が集約されている。ダール・フリーはこの100年間、ほぼ一貫してムフタルをつとめ、ダール・フリー出身者以外でムフタルの座に就いたのは、いずれもダール・フリーと姻戚関係にあるダールの者である (表3参照)。1972年以降、ダール・フリーとダール・アースイーが交代で村長を出すようになった。

選挙に際して、候補者はダールごとに複数あるいは単数立てられる。制度上、選挙権は18歳以上、被選挙権は20歳以上の心身ともに健康な男女すべてに与えられるが、誰が立候補するかはダール内の合議によってあらかじめコントロールされているのである¹⁷⁾。父親が村議会議員をつとめた者が擁立される例が多くみられ、1970年代末から80年代前半に村長をつとめたシャルベル・フリー、筆者の調査期間中に村長の座にあったユーセフ・フリーは、ともに父親が村長・村議会議員経験者であった。ダールの構成員は自ダールの候補に一致団結して投票し、候補者の親族は親交のある他ダールの各世帯を訪問して、自ダール候補への投票を呼びかけて回る。先に述べたように、村議会議員選挙において重要なのは候補者自身の政治的なバックグラウンドではなく、候補者がどのダールに属するかということである。シャルベル・フリーは長年労働党員であるが¹⁸⁾、そのことと村議会における彼の役割は一切関わりがないと、彼自身は語っている。いまだに村議会議員選挙は候補者個人の素質ではなく、候補者の属するダールの力によって動かされているのである。

3-2 村議会制に残る旧制度の名残：イルティザーム制、ムフタル制

さて、村議会制がオスマン帝国時代の末端地方行政システム、ムフタル制の焼き直しであることは、既に述べた。この項では、ムフタル制がどのようなものであったのか、1965年に村議会制が施行されるまで、誰がF村でムフタルをつとめていたのかについて述べる。

ムフタル制は18世紀前半からオスマン帝国内部で敢行されていた、一連の行政改革のなかで誕生したものであり、1864年の行政州法、1871年の行政州行政法において定められた。その内容は、村落のなかから人口に応じて一名ないし複数の代表、つまりムフタルを選出し、徴税や村落内部の道路・建造物管理、治安維持、村民への公的任務割り振りなどの役割を任せるというものである [Baer 1982 :115]。それまでオスマン帝国治下のシャーム地方¹⁹⁾の農村では、アラブ社会の慣例として、地元の有力ハムーレの長 (シャイフ) が合議によって地方行政をおこなっていた²⁰⁾。ムフタル制の制定により、彼らのうちのひとりがムフタルに選出され、その他の者は補佐に回るというシステムに切り替わることになる。この時点では、ムフタルは村民全体の投票ではなく、シャイフたちの合議によって選ばれるものであった。

オスマン帝国滅亡後、シャーム地方はサイクス＝ピコ協定の取り決めによって、英仏の統治下に分割される。ガリラヤ地方は歴史的にもっとも関わりの深かったレバノン南部と切り離され、パレスチナの一部として英国委任統治下に置かれた。委任統治開始直後、英国は一旦ムフタル制を廃し、独自の地方行政制度を敷こうとしたが、結局ムフタル制を復活させる [Baer 1982 :114]。さらにはその後建国

されたイスラエルがこれに多少の手を加え、村議会制を定めた。つまり、今日の村議会はムフタルを首長としたシャイフたちの合議の場に他ならず、オスマン帝国時代のムフタル制とそれ以前の状態が現代に受け継がれているのである。ただひとつの相違点は、彼らが村民全体の選挙によって選出されるということである。同じく英国の統治下にあった隣国ヨルダンでも、ムフタル制が法制度のなかに改訂を加えられた形で取り入れられている [Baer 1982 : 120]。

F村では、1864年の行政州法が發布されてまもなく、F村初代ムフタルとしてミハイル・フーリーが選出されている。ミハイルはダール・フーリー始祖である在俗司祭ガッターズの三男であり、以後、ムフタル職はミハイルの長男ショウイーをはじめとして、ミハイルの子孫（ダール・フーリー内のミハイル系）に受け継がれていった。図10のダール・フーリーの系譜では、ムフタル在職経験者が▲であらわされているが、これをみてもミハイル系からいかに多くのムフタルが出ているかが分かるであろう。19世紀中葉から1956年までのムフタルの一覧が表3であるが、このなかにはフーリー以外のダール出身者の名もある。実は、彼らの属するダールはいずれもダール・フーリーと婚姻関係を結んでいるのである。このうち、ダール・フランスィースとダール・アブー・アイユブの両ダールと、ダール・フーリーの関係については、次項で詳しく述べる。

ムフタルの出自に変化があらわれるのは、1945年である。歴代のムフタルは一貫してミハイル系、およびミハイル系と姻戚関係にある他ダールの者で占められていたが、この年に選出されたエリヤス・フーリー2世は、ダール・フーリーのエリヤス系出身である。エリヤス系の初代であるエリヤスは父親から在俗司祭の職を受け継いだ。それ以降はこの系統が聖職者を出すことはなく、また20世紀初頭までF村の政治に関わることはなかった。しかし、エリヤス2世のムフタル選出を機に、エリヤス系はミハイル系に取って替わり、F村の政治の中核を握るようになる。頂点は1960年代末から70年代にかけてであり、エリヤス系のラシードが三期に渡って村長をつとめ、その後80年代には彼の息子シャルベルが跡を引き継いだ。ラシードは在職中、一時体調を崩して村長の座を退いているが、このとき代理村長としてミハイル系のファリード（図10参照、ダール・フーリー系譜中の▲の⑥）が立っている。ただし、彼が代理村長の座にあったのはわずか5ヶ月であり、その後はミハイル系から村長も村議会議員も出ない。村議会議員選挙に際し、村長候補は複数の有力ダールから各一名の候補が出る。四つの系統に分かれたダール・フーリーの場合、候補者を出せる系統こそが、ダール全体の統括権を持つ系統である。20世紀中葉以降、ダール・フーリーの統括権はミハイル系からエリヤス系に移行したといえる。この現象がなぜ起こったのかを端的に示しているのが、次項でみる両者の婚姻関係である。

3-3 有力ダールの婚姻関係と村議会制のかかわり

この項では、F村行政の中核を担うダール・フーリーとその周辺の婚姻関係について、具体的な実例を挙げる。中心となるのは、1980年代に村長を一期つとめ、今日もなお村議会への影響力を持つシャルベル・フーリーである。彼自身、および彼の前後三代に渡る婚姻関係が、ムフタル制および村議会制にどのような影響を与えているのか、みてゆきたい。

3-3-1 ダール内婚姻：結束の象徴

前項で述べたように、ここではシャルベルの周囲で結ばれた、ダール・フーリーのミハイル系とエリヤス系の婚姻関係をみてゆくことにする。

シャルベルは1930年生まれで、調査当時は70代前半であった。彼はダール・フーリーのエリヤス系に属し、1980年代に村長を4年間、つまり一期つとめた。前述のように、彼の父親ラシード（2000年10月に逝去）と、伯父であるエリヤス（故人）もまた村長をつとめており、シャルベルの弟ガッターズもまた、

村議会議員経験者である。故人の業績は葬儀ミサの規模に比例するが、2000年10月から11月にかけておこなわれたラシード・フリーの葬儀ミサは、彼を偲ぶ者が村の内外から宗教・宗派を問わず、多数参列した²¹。シャルベルとガッターズの兄弟はすでに村内政治の一線を退いてはいるが、今日もなお村議会議員たちの私的な相談役をつとめている。

ダール・フリーの系譜（図10参照）で特徴的であるのは、シャルベル周辺におけるダール・フリー内部、殊にシャルベル自身の属するエリヤス系内部の血縁関係の濃さと、親子二代に渡って結ばれているエリヤス系とミハイル系の婚姻関係の強固さである。シャルベルの妻アビールは同じエリヤス系に属し、しかもシャルベルとは父方平行イトコの関係にある。アラブ社会ではイトコ婚が好まれる傾向があるが、なかでも父方平行イトコ婚がもっとも好ましいとされている。アビールの姉バディーア（ウンム・ジョゼーフの尊称で呼ばれているため、以下ウンム・ジョゼーフと記述する）は、ミハイル系のジョルジュ（アブー・ジョゼーフ、故人）と結婚し、その娘であるテレーズは、シャルベルの弟ラダーに嫁いでいる。おじとめいの結婚もまた、アラブ社会ではしばしばみられる親族内での婚姻形態であり、ウンム・ジョゼーフとテレーズの母娘によって、エリヤス系とミハイル系の結びつきは二重に強化されているといえるであろう²²。

これらの婚姻関係は、ムフタル職をダール・フリーの者に継がせてゆくための策であったようである。ウンム・ジョゼーフとアブー・ジョゼーフが結婚した1939年当時、ミハイル系は構成員の多くが村外へと移住し、人員不足に悩まされていた。移住の傾向は20世紀初頭からみられ、実質上ミハイル系最後のムフタルとなったアディーブ・フリー（表3の⑥）が、その最たる例である。彼はムフタルに選出された当時、既に村を離れ、アメリカに移住していた。村に残っていたきょうだいたち、アブー・ジョゼーフらイトコたちが補佐をつとめたが、彼らの子の世代になると、さらに村外への移住の傾向は強くなっている。事実、アブー・ジョゼーフ夫婦の7人の子のうち、6人が村外に移住している。村内の基盤が脆弱になったミハイル系が持みとしたのが、ミハイル系に継ぐ地位にあったエリヤス系であった。エリヤス系が選択されたのは、元来この系統がミハイル系に継いで多くの構成員を抱え、なおかつ系統の始祖であるエリヤスが在俗司祭という、人望を集める職にあったためであろう。

村長および村議会のもっとも重要な仕事は、国から可能な限り多額の予算を引き出すことであると、第11期村議会の村長をつとめたユーセフ・フリーは語る。つまり、中央とどれほど緊密な関係を構築できるかにかかっているのである。イスラエル建国後、約30年の長きに渡って与党であったマパイの党員であり、なおかつF村村長をつとめたのが、エリヤス系のラシード、シャルベル親子であった。両者は党大会にも積極的に出席し、閣僚経験者とも個人的な親交を結ぶに至った。既に村議会を引退したシャルベルが、今日に至るまで村議会議員の相談役としてしばしば村役場に顔を出しているのは、彼が元村長であり、ダール・フリーの長であるだけでなく、中央とのコネクションを持つ労働党員であることが大きく関わっているのである。

しかしながら、エリヤス系もミハイル系と同じく、村外への人口流出によって後継者不足に悩まされるようになる。シャルベルには息子が生まれず、彼の弟であり元村議会議員であるガッターズの長男を後継者にしたいと、常々考えていた。ところが、その長男が事故により早世する。このため、村の内外で政治力を評価されていたジュリエス系のユーセフが擁立され、村長となった。しかしながらユーセフも自分の仕事と村議会の仕事のバランスを保つことが難しくなり、身内の不幸もあって体調を崩す。結果、次の第12期村議会議員選挙においてダール・フリーは敗北し、以後ダール・フリーから村長は出ていない。

シャルベル・フリーがマパイに入党した経緯と、そのことが周囲に与えた影響については、4であらためて詳しく扱う。

3-3-2 ダール外・村落内婚姻：村議会議員選挙のための戦略として

エリヤス系のシャルベルの周辺で、特徴的なダール外婚姻をおこなっている者は三人いる。いずれも非常に近い血縁者であり、そのうちのひとりハディラはシャルベル自身のひとり娘である。まずひとはシャルベルの妻アビールの弟であり、シャルベル自身とも父方平行イトコの関係にあるナビル。二人目はアビール、ナビル姉弟の長姉であるウンム・ジョゼーフの息子、ジョルジュである。ナビルは村長を輩出する有力ダールのひとつであるダール・ジュリエスから、ジョルジュは村内政治よりもむしろ教会での奉仕活動に熱心なダールであるダール・アブー・アイユーブから、それぞれ妻をめとっている。

その1 ナビルとハディラの事例：ダール・ジュリエス、ダール・ナッジャールとの関係

ナビルは1931年の生まれである。シャルベルの妻アビール、ウンム・ジョゼーフらのきょうだいの末弟であり、シャルベル自身とも父方平行イトコの関係にある。1966年、ダール・ジュリエス出身のハディラと結婚し、マール・エリヤス聖堂近くに住んでいる。聖堂前に現存する、彼らいとこたちの生まれ育った「ラダーの家」からナビールの家にかけての一带は、ダール・フリーのエリヤス系、ジュリエス系の土地である。エリヤス系の祖であるエリヤス・フリーが、その父親ともどもF村のメルキト派司祭であったことの名残とされている。

ダール・フリーの人びとから見ると、ダール・ジュリエスは婚姻関係を結ぶ間柄ではあるが、ややダール・アースイー寄りであるとされている。ダール・アースイーは村の西側斜面から北側斜面にかけて多く住んでいるが、ダール・ジュリエスも同様である。しかしながら、ハディラがダール・フリーに嫁いだ背景には、彼女の母親がダール・フリーと近いダール・ナッジャールの出身であることが関わっていたようである（図11参照）。ハディラの叔母の生家は、ウンム・ジョゼーフの家の隣に位置する。住居が隣接するのは、数世代前にごく近い血縁関係にあったことの証である。

ダール・ナッジャールもまた、村長をひとり、村議会議員を数人出したこともある有力ダールのひとつである。しかしながらこのダールは、今日村議会よりもむしろ教会活動に熱心なダールであり、ダールの中心的存在であるムサー・ナッジャールは、村の小学校教師にしてマール・エリヤス聖堂の主席シャンマースである。その長男は村議会の開いた図書館の管理人であり、シャンマースの見習い中であつた。

その2 ジョルジュとレイラの事例：ダール・アブー・アイユーブとの関係

ジョルジュはシャルベルの妻アビールの長姉であるウンム・ジョゼーフの末の息子として、1954年に誕生した。父親であるアブー・ジョゼーフはミハイル系であるので、ジョルジュもミハイル系の一員であるが、彼自身は父方よりも母方であるエリヤス系の人びとと接触する機会が多い。ジョルジュの兄弟姉妹も含め、ミハイル系の同世代の人びとの多くが村外（ハイファなどの都市）、あるいは海外（北米など）に移住しており、現在F村にはあまり残っていないのである²³。3人の兄たちが村を離れ、ヤーファやハイファで出稼ぎ労働者となっていた一方で、ジョルジュは父親の跡を継ぎ、家具や農具を専門に製作する大工となった。F村のみならず、近隣のKs村やTs村、ユダヤ人入植地のMl、さらには都市ナハリヤやアッカにも得意先を多く持ち、「顧客の半分はユダヤ人」とであると語る。

彼は1975年に、ダール・アブー・アイユーブ出身のレイラと結婚した。現在住んでいる家は、彼が父親から受け継いだものであり、隣には同じくミハイル系のザキー・フリーが住んでいる。レイラの実家は、この二世帯が住む土地とは、道を一本隔てた近所である。彼女の生家の周辺には、ダール・アブ

ー・アイユーブの人びとが集住している。ダール・アブー・アイユーブは、20世紀初頭に一度ムフタルを輩出しているが、村内政治よりもむしろ教会における活動に熱心なダールとして知られている。レイラの父親は、教会におけるミサの責任者、サーヒブ・ル・イード (Sahib al- Īd) をつとめるアズィーズ・アブー・アイユーブであり、彼の兄と長男 (レイラの兄) もまた、ミサにおいて不可欠な聖書の朗読や聖歌斉唱を担当するシャンマースをつとめている。

レイラがジョルジュの妻にと望まれたのは、ふたりが幼い頃から顔なじみであるからという理由ばかりではなく、彼女自身がダール・フーリーのミハイル系の血をひいているためであった。レイラの母親であり、アズィーズの妻であるモニラは、ダール・フーリーのミハイル系出身である (図10右端参照)。ナビールの妻ハディラにも同様のことがいえるが、母方の血筋を遡ればつながりが見いだせるという条件が、婚姻関係を結ぶ際の理由として好まれる傾向がある。

また、アズィーズの娘たちの嫁ぎ先は、F村におけるダール・アブー・アイユーブの位置をうかがわせ、興味深い。長女のレイラはダール・フーリーのジョルジュと結婚したが、次女のサミーラはダール・フーリーとは対立関係にあるダール・アースィーに嫁している。ダール・アブー・アイユーブはカテゴリーIに属する、F村への定着が比較的早く、土地を所有する有力ダールのひとつではあるが、ダールの規模においてF村の双壁はダール・フーリーとダール・アースィーであり、アブー・アイユーブは両者とは比ぶべくもない。また、村内政治に特化している両ダールとは異なり、村内政治に関わりつつも、どちらかといえば教会の活動において存在感を示している。ダール・フーリー、ダール・アースィーの両者とひとしく姻戚関係を保つことで、ダール・アブー・アイユーブはF村内部における地位を維持しているのである。

その3 シャルベルの娘ナダーとファウズィーの事例：ダール・フランシースとの関係

シャルベルとアビールの夫婦は男子に恵まれず、女子がひとり誕生したきりであった。1964年生まれの名ナダーである。彼女はTs村の銀行に勤務するダール・フランシースのファウズィーと、1989年に結婚し、その後5人の男子に恵まれた。

ダール・フーリーとダール・フランシースは、ムフタル職をめぐる少なからず関係がある。初代ムフタルのミハイル・フーリーの娘婿となったハビーブ・フランシースは、のちに三代目のムフタルとなっている。ミハイルからその長男ショウイーへと継承されたムフタル職が、娘婿とはいえ養子ではなく、他ダールの長であるハビーブに受け継がれたことは、異例の事態といってよい。その後三代を経て、ナジブ・フランシースが第10期村議会の村長をつとめている (図10と図12 参照)。彼は村長就任以前にも第8期、第9期村議会で連続して副村長をつとめており、このうち第8期の村長が、シャルベル・フーリーであった。また、第10期村長を最後に村議会から引退した後も、しばしば村役場を訪れ、第11期村長であるユーセフ・フーリーの相談に乗る姿がみられた。

ナダーは自分の結婚について、「父親が決めたこと」であり、「ファウズィーのことは昔からよく知っていたし、安定した仕事に就いている人なので、なんの心配もなかった」と語る。なぜファウズィーをひとり娘の婚約者に選んだのかについて、シャルベルは「(ファウズィーの長兄である) ナジブは公私に渡る長年の友人であるし、ファウズィーがナダーにとって、もっとも適した相手だと思ったから」とだけ語ったが、おそらく三代前のダール・フランシースとの婚姻関係を考慮に入れてのことであったろう。その証拠に、ファウズィーは幾度かシャルベルから村議会議員選挙への立候補を促されたという。「村議会には既に兄が深く関わっているから、自分があえて村議会に立候補したいとは思わないし、その必要はないと思う。しかしいずれ、息子たちのいずれか、とりわけシャルベルの名を受け継いだ長男

が、シャルベルの後継者と目されることになるかもしれない」と、ファウズイーは語った。

このように、今日みられるダール外・村落内婚姻には、4年に一回おこなわれる村議会議員選挙における得票をめぐる関係構築が明確にあらわれている。しかしながら、緊密に結ばれた婚姻関係が、得票に結びつかない場合も時としてある。殊にダール・フーリーの場合、構成員の村外移住に拍車がかかっているため、近年は村議会議員選挙で他ダールの候補に敗北するというケースもみられる。これまでダール・フーリーが婚姻関係を結んできた有力ダールから候補者が立つようになり、票がダール・フーリーの候補に集まらなくなっているのである。

＜村議会議員選挙の票のゆくえに対する、女性たちの批判：2001年7月＞

筆者がF村で調査をしていた2000年末の時点で、村長をつとめていたのはダール・フーリーのユーセフ氏であった。彼はダール・フーリーのなかでも比較的小さなジュリエス系の出身であるが、博士号を持つ神学・歴史学者であり、キリスト教徒とイスラーム教徒の融和を訴えるコミュニティ・センターの所長としての知名度を高く評価されていた。村長候補となったのも、この業績ゆえである。シャルベル以来ダール・フーリーからは村長が出ておらず、本来ならばエリヤス系からシャルベルの次の世代が村長候補として立てられるはずであるが、シャルベルには男子がなく、後継者と目されていた甥は夭逝してしまった。ユーセフ擁立の背景には、エリヤス系内の人材不足があったようである。

ところが、ユーセフは村長に就任してから体調を崩し、任期後半は入退院を繰り返していた。このため、2001年4月におこなわれた村議会議員選挙では、再選をめざして立候補したものの敗北し、ダール・ジュリエス出身の候補が村長に選出された。ユーセフ自身は「体調も悪く、コミュニティ・センターの仕事をあまりできなかったので、選挙に負けたことについては悔いてはいない。そうなる巡り合わせだったのだろう」と語り、選挙結果への未練は一切残していないようであった。ところが、ダール・フーリー内部、殊に女性たちの間ではダール・ジュリエスへの批判が囁かれていた。前回の選挙ではダール・フーリーに協調し、ユーセフに票を投じたダール・ジュリエスが、今回は自ダールの候補を立ててユーセフに投票しなかったことが敗因であるというのである。シャルベルの近親者たちがしばしば集うナビール・フーリーの家でも、この話題が人びとの口にのぼることがあった。そのようなとき、いつもは積極的に話の輪に加わるナビールの妻ハディラは、人知れず台所に下がって黙々とコーヒーを淹れていた。ダール・ジュリエスの出身である彼女には、耳の痛い話題だったのである。

この事例において、ダール・ジュリエスの「背信」を非難するのが女性であるという点が、興味深い。イスラエルの影響により、周辺アラブ地域よりも民主主義的であるとされるイスラエル・アラブの社会においても、女性の政治参加は著しく遅れている。現在、F村の村議会議員10名はすべて男性であり、女性は候補者が立ったことすら一度もない。村議会議員選挙において、唯一取れる積極的行動が投票のみという状況に置かれている女性たちが、選挙後3ヶ月を経てもなお、票のゆくえについて批判する。それはまさしく、ダール同士の結びつきがダール外・村落内婚姻によって形成される、つまりは女性の交換によって成り立っているためである。自分たちが礎を築いているという意識があるからこそ、女性たちはダール同士の連帯関係に興味を示し、背信行為がみられれば、口を極めて非難する。自分の役割が十分に発揮されていないと知れば、ナビールの妻ハディラのように、深く恥じ入るのである。

4. 労働シオニズム政党、メルキト派カトリック教会とダールの関係

前節では、村落内のダールの関係性について述べてきたが、本節では外部から加えられる力とダールの関係をみてゆくことにしたい。

4-1 労働シオニズム政党の影響

4-1-1 シャルベル・フリーのマパイ入党とその背景

特定のハムーレが村議会を支配しているという現象は、F村だけで起こっていることではない。イスラエル国内のアラブ人村すべてで同様の現象がみられ、またこの現象は、イスラエルの歴代政権がアラブ人を統治するうえで、おおいに利用されることとなった。その基礎を築いたのが、1949年の第一期国会から77年の第七期国会に至るまで連立政権の中核を担い、現在のイスラエル労働党 (Hizb al-`Amal, *Mifleget ha-`Avodā*) の前身となったマパイである。マパイは英国委任統治時代に結成された労働シオニズム政党であり、その基盤はヨーロッパ諸国からの移民により、当時爆発的に人口が増加していたユダヤ人労働者のための労働組合、労働総同盟 (ヒスタドルート、*Histadrut*) であった。

1948年から66年まで、イスラエル政府はアラブ人人口の集中しているガリラヤ地方に軍政を敷き、50以上もの地区に細分して統治した。この統制下において、地区間の移動には許可証が必要となるなど、アラブ人市民は生活上多大な困難を強いられることとなった [Lustick 1980: 124]。移動許可証の取得がアラブ人に義務づけられた背景には、英国委任統治時代、ヒスタドルートに加盟していたユダヤ人労働者と、ガリラヤ地方の農村から都市へと出稼ぎに出るアラブ人労働者が、都市の労働市場において熾烈な競合関係にあったという事実がある。ユダヤ人労働者よりも安い賃金で働くアラブ人労働者は脅威であり、マパイが主導したガリラヤ地方の軍政は、アラブ人労働者を労働市場から排斥し、ユダヤ人労働者を守るうえで、非常に有効であったとすることができる。

ところで、本来農民であったガリラヤ地方のアラブ人たちは、なぜ都市へと出稼ぎ労働に出るようになったのか。その背景には、オスマン帝国支配下から英国委任統治下へと移行する時代の社会の変化と、農業用地の喪失がある。まず、英国による委任統治がはじまるにあたって、土地管理制度が改変された。それまで土地はハムーレ単位で管理していたのであるが、制度改変により、登録制の個人所有・管理となったのである。このため、土地を持たぬ農民が激増し、彼らは都市部へと出稼ぎに出てゆかざるを得なくなった。このことは、村社会の基盤である血縁の力の弱体化を招いた [Cohen 1965: 8]。また、英国委任統治下に組み入れられることによって、「聖地」巡礼が簡便になったパレスチナには、ヨーロッパから多くの宣教団や巡礼団が押しかけ、観光産業の需要が急増した。キリスト教徒、ことにメルキト派カトリックの場合、同じカトリック傘下にあることを理由にローマ・カトリック宣教団を受け入れることはたやすく、また彼らの下で働くことに抵抗感を抱くどころか、むしろ魅力を感じていた。ゆえにローマ・カトリック教会の宣教団は、都市に出たメルキト派信徒を取り込むことに成功した。今日もなお、都市に出たメルキト派信徒は、宣教団の施設に精神的・物理的側面から支えられている。

さらにイスラエル建国時には、アラブ人村落は政府により多くの農業用地を没収された。それまでに土地を所有していた有力ハムーレに属する者も、農民として生活することが困難になったのである。しかしながら、軍政府を通じて内務省が発行する移動許可証がなければ、都市はおろか隣村へ移動することもできない。マパイはこの点を利用して、移動許可証を優先的に発行することと引き替えに、各村の村議会への影響力を強めていった。村によっては、村民による村議会議員選挙をおこなっても、マパイが投票率の低さを理由に村議会議員を追加任命するという事態まで起きていたのである [Al-Haj &

Rosenfeld 1990: 59]。これを受けて、マパイの影響力を抑えるために、有力ハムーレの長が孤軍奮闘したり [Sa'di 2001]、若者たちが新たな選挙リストを立ち上げて対抗したりする動きがみられた地域もあった。マパイによる地方選挙への介入のみならず、特定ハムーレによる選挙制度の私物化にも異議申し立てをすることが彼らの目的であったが、結局その試みは失敗に終わる。これらの運動が失敗に終わったのは、当時イスラエル・アラブの間で人気を博していた共産政党ラカハが、地方政治への影響力を強化しようとしていたのを、マパイが牽制しようとしたためであったというが、それは目的のひとつにすぎない。村議会における権力獲得を好餌に、マパイは各村において、有力ハムーレを取り込むことに成功していった。

ここでふたたび、70年代末から80年代初頭にかけて村長をつとめた、ダール・フーリーのシャルベルの事例を紹介したい。父方のおじと父親が村長をつとめていたこともあって（図10、表3参照）、彼は若い時分から村議会に近い場所にいたが、もともとは銀行員である。当時、50年代中葉に、彼はヒスタドルトに加盟し²⁴、ほどなくしてマパイ党员となった。その後、1979年に父親の跡を継いで村長に選出される。現在は政治の一线を退いて久しいが、いまだにマパイの後身である労働党员であり続けている。しかも、党大会や外遊など、党内の活動にも積極的に出席し、元外相など閣僚経験者にもコネクションを持っている。

幾多ある政党のうち、なぜマパイ・労働党を選択したのかという問いに、彼は「労働党が、自分の政治理念にもっとも合致するから」と答えた²⁵。現在幾つかのアラブ人政党が発足し、国会議員選挙時にはイスラエル・アラブの支持を集めているが、それらの政党に鞍替えするつもりはないと、彼は主張する。またその一方で、彼は「労働党员であったから、村長に選出された訳ではない」という点を強調した。自分を村長の地位に就けたのは、労働党员であるという彼自身の政治的バックグラウンドの力ではなく、彼の血縁的バックグラウンド、すなわちF村の有力ダールであるダール・フーリーの一員であるという事実であったというのだ。

実は、シャルベルのこの発言の裏には、マパイ・労働党とF村をつなぐ、もうひとつの関係性が隠れている。当時、マパイはメルキト派カトリック信徒に絶大な影響力を持っていたのである。このことは、1943年から67年までメルキト派カトリック教会のガリラヤ司教をつとめたジョルジュ・ハキーム (Georgios/George/Jūrju Hakīm) が、マパイ党员であったことと深いかわりがある。ハキーム司教は当初、アラブ・ナショナリズム的な政治姿勢を示し、ガリラヤ地方のアラブ人社会の指導者となることを望んでいたが²⁶、そのころみは次々に頓挫した。その末、彼は1951年に突如としてマパイへの加入を表明し、以後国会議員選挙のたびに、信徒へマパイ・労働党への投票を呼びかけるようになったのである [Landau 1993: 44, 126]。ハキーム司教が離任するとともに、ガリラヤ司教座の極端なマパイ・労働党支持傾向は陰をひそめるが、今日依然としてメルキト派信徒の間では、とりわけ老年層に労働党支持の傾向が根強く残っている。「労働党员であったから、村長に選出された訳ではない」というシャルベルの発言には、F村におけるダール・フーリーの力と、メルキト派信徒しか存在しない村におけるマパイ・労働党の影響力の双方に支えられているという安心感が、見え隠れしているといえよう。

4-1-2 村民の意識の変化：第16期国会議員選挙（2003年1月）をめぐって

現在、イスラエル・アラブのなかでの労働党支持率は、決して高くはない。地方選挙はダール同士の権力のせめぎあいのある場であるため、イスラエル・アラブの支持する政党をうかがい知ることはできないが、比例代表制である国会議員選挙においては、支持政党の傾向は如実にあらわれる。事実、2003年1月におこなわれた国会議員選挙においては、大多数のイスラエル・アラブ有権者がアラブ人政党に投票

している。その事実を示すのが、以下の事例である。

**<第16期国会議員選挙投票直前、支持政党をめぐるF村ダール・フリーーの人びとのやりとり：2003年1月>
登場人物（合計7名、筆者除く）：**

シャルベル・フリーー（元村長、労働黨員。70代後半）

ナビール・フリーー（シャルベルの父方平行イトコで、彼の妻の弟。70代前半）

ナビールの息子たち2名（長男と三男、30代前半と20代中盤）

ナビールの妻ハディラ（ダール・ジュリエス出身、50代後半）

ウンム・ジョゼーフ（シャルベルの父方平行イトコで、ナビールの姉。80代前半）

ジョルジュ・フリーー（ウンム・ジョゼーフの息子で、ナビールの甥。40代後半）

場所：

ナビールの家

イスラエル・アラブにとって、この選挙の関心事はなんといっても、国会議員を免職されそうになっているアズミー・ビシャーラの当落にあった。訪問先のレバノンとシリアで対イスラエル闘争を鼓舞する発言をしたとされ、議員罷免を問う弾劾裁判にかけられている彼は、ナザレ出身のメルキト派信徒であり、アラブ人政党最有力の政党「国民民主連合（ヘブライ語通称バラド／アラビア語通称アッ・タジャンムウ。以下バラドと表記する）」²⁷の党首である。宗教・宗派の別を問わず、彼はイスラエル・アラブの広範な支持を集め、ハイファなどの都市部では、イスラーム教徒の有権者も彼への支持を表明していた。メルキト派村であるF村の人びとは言わずもがなである。

選挙を2日後に控えたある日、ダール・フリーーのナビールの家には、ナビール本人とその妻ハディラ、彼の長男と三男、ナビールのイトコで、彼の姉の夫でもある元村長のシャルベル、そしてナビールの甥であるジョルジュ、その母親でありナビールの姉であるウンム・ジョゼーフが集っていた。日も落ちた頃、ナビールとその息子たち、ジョルジュが外出の用意をはじめた。M村の郊外にある大宴会場に、バラドの候補たちが遊説に来ているので、聴きに行くという。

すると突然シャルベルが、用事があるので帰宅すると言いだした。ハディラがひきとめたが、シャルベルはコートをはおり、帰宅の意志をあきらかにする。ナビールは「おまえも一緒に来たらどうだ」と、シャルベルを誘ったが、結局シャルベルは断り、そのまま帰宅してしまった。気まずい雰囲気になるかと思われたが、それほどでもなさそうである。

「今度の選挙では、我々はバラドに投票するつもりだが、彼（シャルベル）は違うだろうね」と、ジョルジュは筆者に言った。労働黨員のシャルベルは一貫して労働党に投票しており、これまでの選挙では、同じダール・フリーーの一員として、ナビールやジョルジュも労働党に投票していた。しかしながら、今こそアラブ人は自分の意志で考え、自分の望む政党に投票すべきだと、ジョルジュは熱弁を振るう。

それを聞いたウンム・ジョゼーフが、息子であるジョルジュを非難した。「何を言うんだね、シャルベルの言うことに間違いはないよ!」。ジョルジュは反駁した。「おふくろ、おれは自分の耳で聞いたことを信じる。新聞を読んだりラジオを聴いたりして、バラドの主張が正しいと思うから、バラドに投票するんだ。おふくろもバラドに投票しろよ! アズミー・ビシャーラを見殺しにするつもりか?」。ウンム・ジョゼーフは、息子のことばに耳を貸さない。「私はずうっと労働党だよ。これからも労働党に

投票し続けるからね」。年寄りは頑固で困るねと、ジョルジュは苦笑していた。

この事例から導き出せる結論は、二点ある。ひとつはダールで一致団結して投票するという傾向が、いまだ村議会議員選挙では存続していても、国会議員選挙では崩れてきているということ。もう一点は、教会上層部によるマパイ・労働党支持の呪縛から、メルキト派信徒が徐々に解き放たれており、彼らは今日、メルキト派信徒としての自覚に基づき、(同郷者ではないが) 同じメルキト派信徒の候補を自分たちの代表者として選択しているということである。

労働党員である70代の元村長シャルベル、およびその父方平行イトコである80代の老女ウンム・ジョゼーフは労働党を支持し、ウンム・ジョゼーフの息子である40代のジョルジュは、バラドへの支持を表明している。一見すると、世代によって支持政党が異なるようにみえる。しかしながら、ウンム・ジョゼーフの弟である70代のナビールは、労働党とアラブ人政党のどちらを支持するか、この時点では明確には決めかねていた(後日、バラドへ投票したことが判明)。彼の迷いに、労働党支持が根強く残る老年層にも、支持政党の変化が徐々に起こりつつあることがあらわれている。同ダール、しかも非常に近い血縁関係にある人びとのなかでも、今や支持政党は分かれているのである。

アラブ人であり、メルキト派信徒であるF村の人びとの労働党観は、年齢によって異なる。軍政下の記憶を鮮明にとどめている中高年の人びとにとって、労働党は窮屈ながらも安定をもたらす政党であった。労働党は1977年から92年にかけて野に下っていたが、それでもF村の人びとの労働党支持の傾向が変わることはなかった。その要因のひとつとして、この間与党の地位にあったのが右派政党のリクード(Liqūd)であったということが挙げられる。リクードはバイルート侵攻(1982年)、第一次インティファダ(1987年～93年)に至る占領地政策をおこない、今日もなおアラブ人の不興を買う存在である。しかしながら、F村村民の心理にもっとも影響を与えていたのは、自分たちの宗教的指導者であった元ガリラヤ司教ジョルジュ・ハキームが、マパイへの支持を表明したという記憶と、F村の指導者であるラシード・フーリーやシャルベル・フーリーが、マパイ・労働党員であるという事実である。見も知らぬイスラーム教徒やギリシャ正教徒が主導するアラブ人小政党よりは、同じダールに属する血縁者、あるいは同郷者が所属する労働党に投票することを、彼らは選択する。F村村民の労働党支持は、妥協、そしてダールと出身地への帰属意識の産物であったといえる。

しかしながら、先の事例で人びとの話題にのぼっていたアズミー・ビシャーラの登場によって、F村の人びとの労働党支持はゆらぎはじめる。ビシャーラは1996年の第14期国会議員選挙で初当選を遂げ、第15期国会会期中の2000年秋、議員罷免の告訴を受けている。結局弾劾裁判は会期終了とともに無効となり、ビシャーラ自身の潜在的な人気と悲劇的要素があいまって、次の第16期選挙ではイスラエル・アラブからの圧倒的な支持を得ての再選という結果をうんだ。F村で彼への支持が飛躍的に高まったのも、この事件が契機と考えられる。ビシャーラとその政党バラドへの支持を表明していたジョルジュらは、いずれも前回までは労働党に投票していたが、「事件を知り、テレビやラジオの報道番組やバラドの配布物を注意深くチェックするようになった」と語る。ビシャーラの政治活動が顕著になった1990年代以降に有権者となった若い世代は、はじめから労働党には投票せず、ビシャーラのバラドを支持する。彼らの親世代にあたるナビールのような中高年の人びとは、身内の絆と教会の意向によって投票し続けた労働党と、アラブ人国会議員として強い存在感を示すビシャーラのバラドの狭間で、逡巡することになるのである。

ところで、アズミー・ビシャーラは、なぜこれほどにF村の人びとを惹きつけるのか。その要因は、

前述のように彼がメルキト派カトリック信徒であるという点に拠るところが大きい。また、彼の母親がF村と歴史的に関わりの深いTs村の出身であるということに、F村の人びとは親近感をより強めた。かつては妥協と教会上層部の意向、さらには村の指導者であるダール・フーリーの力ゆえに労働党に投票していたが、ビシャーラの登場によって、ようやく積極的に票を投じようと思える、メルキト派信徒の候補と政党に邂逅したのである。国会議員選挙に投票することで村外の世界と関わり、F村村民はダールの一員という自己定義の枠の中から飛び出し、メルキト派信徒としての自己を認識する。メルキト派信徒しか存在しないF村において、第16期国会議員選挙はメルキト派信徒としてのアイデンティティが表出する、数少ない機会となったのである。

4-2 超越されるダール

村の日常生活において、すべての基盤となっているのがダールであることは、本章において重ねて記述してきた。しかしながら、アズミー・ビシャーラの国会議員罷免裁判事件と、彼の当落が話題をさらった第16期国会議員選挙を経て、ダール内部の政治的結束は、今日ゆるやかな崩壊へと向かいつつある。ただし、政治的結束と日常生活における結束はまた別物であり、たとえ支持政党が労働党からバラドへと変わったとしても、シャルベル・フーリーとその親族たちの、互いに対する態度は変わらない。彼らは同ダールの同系譜に属し、色濃い血縁関係で結ばれ、さらには皆メルキト派カトリックという同じ宗派に属する、アライブ／アライベ (qaraib/qaraiba)²⁸であるためである。この語をここでは仮に、日本語で「身内」と呼ぶことにする。

身内概念は、ダールへの帰属意識とは必ずしも一致しない。むしろ、身内概念はダールを越え、ダールの範疇外にある人びととの連帯感を育むための装置である。まずは身内概念の整理をおこない、なにが身内概念をダールの範疇から超越させるのかを、あきらかにしてゆきたい。

4-2-1 ダールへの帰属意識を越える身内概念

先に述べたように、身内概念とダールへの帰属意識は、必ずしも一致しない。しかしながら、拡大してゆく身内概念の出発点は、ダールにある。既出の具体例を述べれば、ダール・フーリーのミハイル系やエリヤス系など、ダール内部の下位集団が、もっとも身内概念にあてはまる。

ダールにもさまざまな規模があり、ダール・フーリーのように村内に居住する構成員だけでも700名を越す巨大なものもあれば、数家族だけの小さなものもある。巨大なダールは内部が幾つかの下位集団に分かれているという例もみられ、F村ではダール・フーリーとダール・アースイーがこれにあたる。ダール内部の下位集団のことを、彼らはアラビア語で家族をあらわす「アーイレ (‘āila)」、イタリア語からの転用と思われる「ファミリーア (famīliya)」という名称で呼んでいる。ところが、ときにはダールと呼びあらわすこともあり、これら3つの名称が平行して使用されている。3つの呼称は入り乱れて使用されているが、強いて分別するのであれば、アーイレとファミリーアは集団を内部からの視点に則して語る場合、ダールは外部からの視点に則して語る場合に用いられるという傾向がみられる²⁹。また、ファミリーアを使用するのは女性、殊に若年層から中年層の女性が主であった。

メルキト派カトリック信徒であるF村の人びとにとって、イタリア語はもっとも近しい外国語であり、それを使用することにはカトリックの中心であるヴァティカンおよびローマ、さらにはヨーロッパへの憧憬がこめられている。イタリア語由来の単語が呼称にあてられていることから、ダール内部の下位集団が強く意識されるようになったのは最近のことであると推測される。つまり、下位集団ダールは、長らく上位集団であるダールと同一視されていたということである。最初は親子数名からなるダールでも、年月を経て、世代交代とともに人数が増えるに従って膨れあがり、内部で分裂してゆく。つまり、ダー

ル・フリーのような巨大なダールでは、下位集団ダールは狭義での身内、上位集団ダールは広義での身内なのである。

ところが、アイレとファミリーアということばは、文脈によっては下位集団ダール以外のものを指す場合もある。自分の属するダールと濃い血縁関係にある他ダールの者、あるいは自ダールに嫁してきた他ダールの女性をさして、「同じアイレ／ファミリーアに属している」という説明がなされるのである。この文脈におけるアイレ／ファミリーアは、ダールの範疇を越えた身内概念をさし、F村内部における日常生活でも、常に意識されているものである。村の内部ではダールが生活のすべての根幹にあるが、身内意識はダールの境界線の内側だけにとどまるものではない。婚姻関係によって、時にダールの枠を超越することもあるのである。

身近なところでは、他ダールから嫁した女性やごく近しい婚姻関係にある他ダールの構成員たちが、身内であるとされる。3-3に登場したナビール・フリーの妻ハディラはこれにあたり、彼女はナビールの妻としての立場に加え、ダール・フリーと緊密な血縁関係にあるダール・ナッジャールの血をひいているという理由から、ダール・フリーの女性たちから身内とみなされている。しかしながら、村長ユーセフの妻は第2節におけるダール分類のカテゴリーⅢ、ナクバによって他村から移住してきたダールの出身者であるため、ダール・フリーの女性たちからはよそ者として扱われ、距離を置かれていた。

F村出身者がダール分類のカテゴリーⅠ、Ⅱに属する、古参ダールの人びとのみをさすことは、第2節第2項で既に述べた。F村に墓所を持たず、根ざすという意識も持たないカテゴリーⅢの人びとが他者であるとすれば、F村に根ざす、つまり帰属意識を感じている者は、すべて身内となる。身内概念はダールへの帰属意識から発し、土地への帰属意識を吸収して、拡大するのである。

4-2-2 「メルキト派信徒であること」がもたらすひろがり

さて、身内概念の拡大に、婚姻関係の他にもうひとつ関わってくるものが、宗教である。メルキト派信徒としての自覚、メルキト派カトリック教会への帰属意識は、ダールや出身地に根ざす帰属意識を凌駕する。F村出身ではない政治家アズミー・ビシャーラが、F村村民たちから支持を集めたのは、彼がメルキト派信徒としてF村の人びとから身内とみなされたためである。また、カテゴリーⅢに属する人びとが、ナクバ後にF村に逃れてきたのは、F村がメルキト派信徒の村であったからに他ならない。F村に根ざすカテゴリーⅠやⅡの人びとのみならず、カテゴリーⅢに属する人びともまたメルキト派信徒であり、F村村民は唯一「メルキト派信徒であること」で結束することができると言えよう。カテゴリーⅢに属するブーロス・ヒンディイエ³⁰が、シャンマースとしてF村のマール・エリヤス聖堂に出入りしていることは、象徴的である。

ただし、メルキト派信徒すべてを覆い尽くす身内概念は、F村村民がメルキト派信徒としての自覚を明確に持ったときにのみ、はじめて出現する。すべての住民がメルキト派信徒であるという大前提のなかで生活している彼らが、F村の内部であえてメルキト派信徒であることを主張したり、強く自覚したりする機会は、決して多くはない。つまり村外の、非メルキト派信徒の存在する場に出るときに、F村村民たちはメルキト派信徒として結束しうるのである。アズミー・ビシャーラのような、非メルキト派信徒にも知名度の高いメルキト派信徒が苦境に立たされた事件は、おそらくF村内に住む人びととしてはじめて、メルキト派信徒であることを強烈に自覚する機会となったのではなかろうか。

おわりに F村村民のアイデンティティとは

本論文では、メルキト派カトリック信徒のみが居住するF村において、そこに生まれ育ったメルキト派信徒たちが身内と他者の境界線をどのようにもうけ、どのようなアイデンティティを形成しているのかについて、既存の研究の空白を埋めるかたちで述べてきた。

F村村民のアイデンティティの構成要素は、三種の帰属意識からなるといえるであろう。まず第一のものが、ダールへの帰属意識である。村落社会の基盤はダールにあり、ダールの力関係が村落の行政を動かしている。このシステムはアラブ社会に古来存在したものであるが、オスマン帝国の行政制度改革を経て、イスラエルのアラブ人市民統治政策のなかでも存続している。

ダールは彼らの持つ身内概念の、もっともミクロな単位である。ダール内、またはダール間で結ばれる婚姻関係は、ダール内外の結束力を高めるための装置として機能した。婚姻によって他ダールから迎えられた女性、数代に渡って婚姻関係を結んできた他ダールは、ダールの枠組みを超えて身内として認識される。

第二の構成要素は、土地への帰属意識である。ただし、「現在住んでいる土地」ではなく、「生まれた土地」への帰属意識である。F村では、2-2の分類ではカテゴリーⅠ、Ⅱに属する人びとが、F村に「根ざす」という表現を用いることによって土地への帰属意識を主張していた。F村への帰属意識を持つカテゴリーⅠ、Ⅱのダールの人びとは、ダール内部、あるいは同ランクのダールと婚姻関係を結ぶことによって、身内の領域を拡大させてゆく。しかしながら、F村への帰属意識を持たない人びと、すなわちカテゴリーⅢのダールの人びとはこの環のなかから疎外されてきた。いまだF村への帰属意識を持てぬまま、両者の溝は埋まらない。土地への帰属意識を持つ者、持たざる者の差異は、人口が流出することはあっても流入することの少ない村落よりも、都市においてより顕著にみられるであろう。

第三が、宗教、すなわちメルキト派カトリック教会への帰属意識である。住民すべてがメルキト派信徒であるF村では、この帰属意識が表出する機会はいらない。政治的な側面からいえば、ガリラヤ司教座の意向を反映した労働党支持によって、F村は安定を手にした一方で、国会議員選挙時の投票の自由を奪われるという、諸刃の剣的な現象を生んでいた。しかしながら、アズミー・ビシャーラの事例にあるように、メルキト派信徒であることを自覚し、身内の領域をF村出身者以外のメルキト派信徒にまで拡大することによって、F村村民は労働党の支配下から脱しつつある。また厳密に言えば、メルキト派カトリック教会への帰属意識と、メルキト派カトリック信徒としての自覚は別物であるが、本論文ではこれ以上言及することはしない。

三種の帰属意識に則し、F村村民の持つアイデンティティもまた、ダールの一員、F村村民、メルキト派カトリック信徒の三種であるといえる。しかしながら、これはメルキト派カトリック信徒しか存在しないF村内部においてのものであり、ひとたび彼らが村から一歩出て、多種多様な他者のただなかで生活するようになったときには、変化がみられるであろう。他宗教・宗派信徒と接触することによって、彼らが村の内部では強く意識することのなかったメルキト派カトリック信徒としての自覚が、強く全面に押し出されるであろうことが予想される。ユダヤ人国家であるイスラエルにおいて、メルキト派信徒、あるいはキリスト教徒であると名乗ることは、アラブ人であるという自己表明にほかならない。サアルがいう、アラブ人キリスト教徒の内面に息づく「パレスチナ人」としての自覚が、果たして占領地パレスチナへの連帯を示すものなのか、それともイスラエル建国以前にアラブ人が住み、漠然とパレスチナと呼ばれていた土地への帰属意識を示すものなのかはあきらかにされていない。しかしながら、村では

表出する機会の少なかったメルキト派カトリック信徒としてのアイデンティティが、彼らのなかに根付く「アラブ人」としてのアイデンティティを暗示していると言うことは可能であろう。

謝辞

本論文で用いた民族誌的資料は、2000年11月～2001年1月、2001年7月～2003年1月、2004年11月の三度の現地調査に基づいたものであり、これらの調査はイスラーム地域研究第3班（国立民族学博物館地域研究企画交流センター）の国際交流、平和中島財団の研究助成、および同志社大学一神教学際研究センターの研究奨励によって可能となった。この場をお借りして、万謝の意を表したい。

¹ただし、「パレスチナ人」という定義には幾通りもの解釈があり、サアルは自身のパレスチナ人の定義について、論文のなかであきらかにはしていない。パレスチナという地名が公式に用いられたのは、オスマン帝国滅亡後に現在のイスラエルに誕生した、「英国委任統治領パレスチナ」が最初であり、パレスチナの名を冠する独立国家は歴史上いまだ存在しない。一般的には、イスラエルによって占領されているヨルダン川西岸地区とガザ地区、つまりパレスチナ自治政府が将来国家を建設した際の領土として想定される地域に住むアラブ人が、パレスチナ人とみなされている。しかしながら、2006年初頭まで自治政府の中核を担っていたPLOのパレスチナ憲章では、イスラエル建国以前にパレスチナに住んでいた者すべてがパレスチナ人に相当するとされている[広河 2002: 219]。また、パレスチナという地名がアラブ人の間で一般的になったのは、英国委任統治時代の反帝国主義運動を通じてのことである。イスラエル建国後のパレスチナ解放運動はアラブ・ナショナリズムと連動しており、パレスチナ人としてのアイデンティティは、多分にアラブ人としてのアイデンティティと重なりといえる。

²オスマン帝国時代、コーカサス地方から移民してきた人びと。イスラーム教徒であり、今日もなお彼らの集落がガリラヤ地方中部から北部にかけて点在している。イスラエル政府からは、イスラエル・アラブとは異なるエスニック・グループとして扱われている。

³モシャーフ (*Moshāv*) とは、キブツ (*Qibūz*) と同じくイスラエルの国営管理農場の一形態である。農場内のすべてのものが労働者の共有物であるキブツとは異なり、モシャーフでは土地の私有が認められ、農業経営が個人にゆだねられていることが最大の相違点である[大岩川 1983: 64-65]。また、モシャーフのほうがキブツよりも比較的小規模である。

⁴F村出身であり、現在ハイファに在住する60代の女性ウンム・イブラーヒームは、1970年に自身が結婚する際、父親（本論文でちに登場する、ウンム・ジョゼーフの夫）が彼女に贈る金のブレスレットをF村からベイルートまで買いに出かけたと言。アラブ人女性には、財産の一部を金製の装飾品として身につける習慣があり、それは多くの場合、ハイスクール卒業や就職、結婚など人生の節目に親から贈

られる。ウンム・イブラーヒームが結婚した当時、村には金製品の店はなかった。また、彼女は1982年の夏、ハイファでベイルートのパレスチナ難民キャンプから来たという女性の訪問を受けたことがある。その女性は、ウンム・イブラーヒームが住んでいる集合住宅のかつての住人であり、1948年のイスラエル建国に際して起こった騒乱（ナクバ、詳しくは本文14ページの記述を参照のこと）のため、両親ともども家を捨ててレバノンへ逃れたと語ったという。

⁵3カ所の「市（*'ir*）」は、シェファールムルウ（Shifa'umru）、ナザレ（al-Nasira）、ウンム・ル・ファーム（Umm al-Fahm）。ハイファやアッカはユダヤ人との混住地であるため、この範疇ではない。

⁶ここでいう聖者（*qadīs/qadīsa*）とは、イスラームおよびキリスト教で、神と一般信徒の間を取り持つ聖なる人物をさす。メルキト派信徒にとって、聖者はカトリックでいう聖人（ローマ教皇庁によって死後列聖され、神へのとりなしをおこない、奇跡を起こす力をそなえた者。殉教を遂げたり、生前篤信家として高名であった者が列聖される）と、預言者（旧約聖書に登場する、神の言葉を預かり人びとに伝える役目を負った者）すべてを含む。聖者信仰は、イスラームにおいてもキリスト教においても、民間信仰的色合いの強いものである。ほとんどの村には聖者廟（*maqām*）があり、モスクや聖堂の一角を占めるか、あるいはモスクや聖堂そのものを兼ねていることが多い（もちろん例外もある）。そこに詣でる人びとは、聖者廟近くの木に布を結んだり、廟にオリーブ油を注いだりして、病の治癒や現世における成功を祈願する。ガリラヤ地方におけるマール・エリヤス信仰のもっとも大規模な例は、ハイファで毎年7月20日におこなわれる、マール・エリヤス祭である。

⁷正教聖堂の最前部には、聖職者が身支度を整え、聖体儀礼をおこなう至聖所がある。この至聖所と、一般信徒がミサの際に着席する場所を隔てるアイコン群の壁のことを、アイコンスタシスと呼ぶ。

⁸葬儀ミサの前、1時間ほどをかけておこなわれる儀礼のことを、アジャルという。ミサをおこなう聖堂、公民館、あるいはその近隣の、故人と同ダールに属する者の家などに遺体を安置し、その周りを親族の女性たちが取り囲んで、故人の死を悼む歌を歌う。故人の母親や娘、姉妹など、一

親～二親等の女性の遺族は参加せず、また男性は親族であっても一切参加しない。

⁹ 筆者の調査中にハイファのマール・エリヤス聖堂に赴任していたアブナー・ディーブは、わずか2年半しかハイファに赴任しなかった。「アブナー」とは、アラビア語で司祭を意味する。しかしながら、元F村司祭であり、のちにガリラヤ司教の地位に就いたマクシモス・サッルームは、実に25年もの長きに渡ってF村で聖務にあたった。レバノン出身のアブナー・ディーブは、ハイファでの生活に馴染めず、体調を崩したこともあって、帰郷を強く望んでいたという。

¹⁰ 東地中海に面したシリア、レバノン、イスラエル・パレスチナに、ヨルダン川の東岸を加えた地域を総称して、アラビア語ではシャーム地方 (Bilad al-Sham) という。

¹¹ ダール＝ハムーレが該当しない場合もある。たとえばアル・ハッジによるシェファール・オムルウをフィールドとした調査では、複数ダールからなるハムーレの事例が登場する。ただしこれはイスラーム教徒の事例であり、キリスト教徒のハムーレに同様の事例はみられない [Al-Haj 1987: 74]。

¹² メルキト派の聖職者は、在俗司祭であれば妻帯可能である。ただし叙階以後の結婚は認められず、また修道士と上位聖職者 (司祭長以上。司祭のなかの司祭長候補者も含む) は妻帯不可である。これは同様の規則を持つギリシャ正教の名残であり、一般信徒の見解は好ましいと考える者、不適切だと考える者、さまざまである。不適切であると考えている者は、全ての聖職者に婚姻を禁じているローマ・カトリック教会を引き合いに出し、その傘下であるメルキト派がこれに従わないのは不自然であると述べるのが常である。また、当時は現在のような神学校のシステムが整備されていなかったため、在俗司祭は読み書きのできる篤信家の一般信徒が志願、あるいは推挙され、一定期間の修道ののちに叙階されていた。よそ者のガッターズ・フリーがすぐにF村の司祭になることができたのは、彼が相応の教養を備え、またF村には同等の者がいなかったためと考えられる。

¹³ イスラーム教徒がF村から去ったのは19世紀初頭の話であるとされているが、当時は農地の所有は認められていなかったはずである。実際に農民の土地所有がオスマン帝国で認められたのは、1858年のことであり、ダール・フリーの人びとの語りとは矛盾が生じるが、あえてここは筆者が聞いたまま記述した。

¹⁴ 「ベツレヘムの人」は、正則アラビア語ではベイト・ラハミー (Bait Lahamī) である。タルハミー (Tahamī) というダール名は、このベイト・ラハミーが短縮されたものであり、口語アラビア語でしばしば「ベツレヘム出身の人」という意味で使用される単語である。

¹⁵ カテゴリーⅢに属するダールについて、カテゴリーⅠのダールの人びとは、「我々の村の出身ではない (mish min baladna)」、「F村に根ざしていない (mish majdhur F)」と語る。

¹⁶ 正則アラビア語での表記はal-Balad al-Qadīmaとなるが、F村ではカーフ音 (qa) が、アイン音 (ʿa) に転訛する傾向がある。このため、実際の発音に則した表記では、al-Balad al-ʿAdīmaとなる。既出の「旧聖堂 (al-Kanīsat al-Qadīma)」も同様。

¹⁷ 後述するように、村議会議員選挙の票のゆくえはダール間の婚姻関係と密接に関わっているが、候補者として女性が立ったことは、F村史上一度もない。ガリラヤ地方の他村で女性の立候補者が出た例はあるが、これも当選には至っていない。

¹⁸ 今日のイスラエル労働党は、ヒスタドルート (労働総同盟) を基盤としたマバイを前身としている。これらの団体については、本文中の21ページ、および29ページ以降の4の記述を参照のこと。シャルベル・フリーはマバイ時代からの党員であり、ヒスタドルートのアラブ人局の一員であったことからマバイへ加入した。この経緯についても、4で詳しく述べる。

¹⁹ シャーム地方 (al-Bilad al-Sham) とは、今日のシリアからレバノン、ヨルダン、パレスチナ・イスラエルにかけての一帯をさす、アラブ世界では一般的な呼称である。シャームとはダマスカスの雅名であり、ダマスカスを中心地としてオスマン帝国の支配下にあったシリア行政州は、シャーム地方とほぼ一致する。

²⁰ ムフタルの権限のうちのひとつに徴税権があるが、ムフタル制以前の時代に徴税権を握っていたのが、徴税人 (ムルタズィム、multazim) であった。徴税人が徴税をおこなう制度を、イルティザーム制 (Nizām al-iltizām) という。徴税人もまた、有力ダールのシャイフがつとめており、辺境のシャーム地方において彼らの力が強まることをおそれたオスマン帝国が、イルティザーム制を廃しムフタル制を定めた。ムフタルに付与される権限が、徴税人よりもはるかに多いのは、このためである。しかしながら、実際はイルティザーム制がムフタル制と名を変えただけで、しかも地元の有力者が手にする権限はかえって増大するという結果に終わった。

²¹ キリスト教 (カトリック) では死者の逝去の翌日におこなわれる葬儀ミサに加え、死後3日、7日、40日にも死者を偲ぶミサがおこなわれる。なかでも死後40日前後におこなわれる「ジュンナーズ・ル・アルバイーン (Junnaz al-Arbāʾīn、直訳すれば「40日葬儀」)」が重んじられており、死者が社会的地位の高い者であったならば、村の内外から弔問客がひきもきらず訪れる。ラシード・フリーの場合、近隣のKs村からドルーズ信徒の代表者、Ts村やナザレからイスラーム教徒のダールの代表者などがミサに出席し、F村のマール・エリヤス聖堂はミサ出席者であふれかえった。また、ミサはF村の司祭ではなく、ガリラヤ司教座に在籍する近親者の司祭長アブナー・ニムル (F村ダール・フリー、ミハイル系出身) が執りおこなった。ラシード・フリーの葬儀ミサが大規模であったのは、彼自身と長男であるシャルベルの、村長としての功績ゆえである。

²² ラダーとテレーズの夫婦は、結婚後まもなくカナダのモントリオールに移住した。カトリック圏であるケベック州、アメリカ合衆国西海岸には、F村ダール・フリーとその周辺の人びとが移住しており、互いに緊密な関係を結んでいる。プール・バーのチェーン店を経営するラダーは、その中心的役割を担っている。

²³ ジョルジュは7人兄弟の6番目であるが、兄弟姉妹のうち村に残っているのは彼ひとりであり、イスラエル国内にも長姉ウンム・イブラーヒム (ハイファ在住、本論文の脚

注4に登場)が残るのみである。他はすべて北米に移住し、カナダやアメリカの市民権を得ている。

²⁴ ヒスタドルートに加盟するアラブ人は、当初ユダヤ人加盟者と同等の権利は有していなかった。この不平等が解消されたのが1959年のことであり、年次大会での投票権などを得た。1978年には、アラブ人組合員は1万3000人にもおぼり、全加盟者の10%を占めるまでになった [Lustick 1980 :96]。

²⁵ 2004年11月14日、シャルベル・フリーより聞き取り。

²⁶ イスラエル建国以前に、ハキーム司教は全ガリラヤのキリスト教徒組合を立ち上げるべく、ギリシャ正教会に信徒会議の招集を呼びかけている [Ibrāhīm 1985 : 125]。ほかにもアラブ独立政党を計画したり、政治雑誌を教会から発行したりと [Neuhaus 1990 : 83]、政治家としての活動を活発におこなっていた。

²⁷ アラビア語名称=al-Tajammu' al-Watanī al-Dimuqratt、通称=al-Tajammu' ヘブライ語名称=Brit Leumit Dimoqratiya、通称=BALAD

²⁸ 本論文では、ガリラヤ地方の人びとの発音に則してアライブ/アライベと記したが、正則アラビア語発音ではカーブ/カーバ (qarlīb/qarlība) となる。アラブ人のカーブ概念については、大塚和夫の「下エジプトの親族集団内今と社会的カテゴリーをめぐる覚書」に詳しい [大塚 1983]。

²⁹ たとえば、ダール・フリー出身のAとBが筆者に自分たちの血縁関係を説明するとき、「自分たちは同じアイレ/ファミリアの出身だ」と語り、ダール・ジュリエス出身のCがAとBのことを筆者に語るとき、「AとBは同じダールの出身だ」と語るという例が多くみられた。筆者が2-1で述べた、ハムーレに対する内部呼称としてのダールの定義と一見矛盾しているようであるが、ダールはアラブ人全体にとっての内部呼称なので、矛盾はない。

³⁰ 2-2-2で、カテゴリーⅢに属するダール・ヒンディイエの歴史を語ってくれたブーロス・ヒンディイエは、F村のマール・エリヤス聖堂に8人いるシャンマースのひとりである。しかも、主席シャンマースであるムーサー・ナッジャールがミサに出席できないときは、ほとんどの場合その代役をつとめるほどの詠唱の名手であった。しかしながら、筆者がムーサーに「F村のシャンマースは何人いるか」と問うたとき、彼はF村のシャンマースは7人であるとし、ブーロスの名をその7人のうちに加えなかった。ムーサーが名を挙げた7人のシャンマースは、いずれもカテゴリーⅠに属する有力ダールの出身者であり、ブーロスが除外されたのは、有力ダール出身のムーサーからみれば「F村に根ざさない、よそ者である」とみなされたためと考えられる。

引用文献一覧

ʿArraf, Shukrī wa Rafīq Najjar

Fassūta: al-Tārīkh wa al-Insān.

Baer, Gabriel,

1982 *Fellah and Townsman in the Middle East: Studies in Social History*, London.

Bagatti, Bellarmino,

2001 *Ancient Christian Villages of Galilee, Jerusalem,.*

Chacour, Elias

1984 *Blood Brothers*, Grand Rapids.

Cohen, Abner

1965 *Arab Border-Villages in Israel: A Study of Continuity and Change in Social Organization*, Manchester.

Al-Haj, Majid,

1987 *Social Change and Family Process: Arab Communities in Shefar-A'm*, Boulder & London.

Al-Haj, Majid & Henry Rosenfeld,

1990 *Arab Local Government in Israel*, Boulder, San Francisco & London.

広河隆一

2002 『パレスチナ 新版』、岩波書店。

Ibrāhīm, Hannā

1985 *Hannā Nagāra: Mahāmī al-Ard wa al-Sha 'ab, Akkā.*

Khalidi, Walid(ed.),

1992 *All That Remains: The Palestinian Villages Occupied and Depopulated by Israel in 1948*, Washington, D.C..

Landau, Jacob

1993 *The Arab Minority in Israel 1967-1991*, Oxford.

Lustick, Ian

1980 *Arabs in the Jewish State: Israel's Control of a National Minority*. Austin and London.

Neuhaus, David Mark,

1990 *Between Quiescence and Arousal: The Political Functions of Religion, A Case Study of the Arab Minority in Israel: 1948-1990.* (Thesis submitted for the Degree "Doctor of Philosophy")

大岩川和正

1983 『現代イスラエルの社会経済構造：パレスチナにおけるユダヤ人入植村の研究』、東京大学出版。

大塚和夫

1983 『下エジプトの親族集団内婚と社会的カテゴリーをめぐる覚書』、国立民族学博物館研究報告 8 巻 3 号。

Sa' ar, Amalia,

1998 *'carefully on the margins: Christian Palestinians in Haifa between nation and state'*, American Ethnologist, May 1998, pp.215-239.

Sa' di, Ahmad,
1998 'Control and Resistance at Local-Level Institutions: A Study on
Kafr Yassif's Local Council Under the Military Government' ,
Arab Studies Quarterly, June 22.

